

---

# まほろばから君を呼ぶ

北見滝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まほろばから君を呼ぶ

### 【Nコード】

N0719Y

### 【作者名】

北見滝

### 【あらすじ】

優しい世界は悲しいからくりで動いていた。

その事に気付いてしまった少年少女達のそれぞれの選択。

いったい、いつから掃除をしていないのだろう。燈火はかび臭い部屋の中でぼんやりと思いをはせた。幼いころに幾度となくこの部屋に遊びに来ていたころは、割と小綺麗な印象だったのだが。

「コホッ」

日の光の届かない薄暗い部屋の中は埃っぽく少し喉が痛む。カーテンレールに積もった埃は、もう長い間カーテンが開けられなかったことを言外に示していた。適当にごみ袋に突っ込まれたコンビニ弁当の容器とペットボトル。床とベッドには脱ぎ散らかされた洋服と、読み散らかされた雑誌が散乱している。

……きつとこの部屋は匂うのだろう、キツイ匂いの芳香剤が置いてあった。

部屋の隅には山のように積まれたキャンバスの山。全く何も書かれていないもの、真っ黒の意塗りつぶされたもの、途中でやめたと思われるもの、切り刻まれているもの、へし折られているもの、燃やそうとしたのか半分焦げたもの。積み上げられ、打ち捨てられたそれらは独特な圧迫感があり、燈火はなるべくそれらを視界に入れないようにしていた。

それでもこの左目が見たくもないものを見てしまう。

ズキリと左目の奥に鈍い痛みが走る。

あまりの痛みにくめかみに手を添える。

グラリと目の前の景色がぶれる。

『見たくない』と左目を強く閉じる。

しかし、わずかに遅かった。瞼の裏にさつきほど見てしまった景色の残像が浮かび上がる。

薄暗い部屋の中、この部屋の主が首を吊っている。

燈火は喉からせり上がってくる吐き気におもわず顔をしかめた。

数分間、宙で静止していた絵筆は一度もキャンバスをなぞることなく、パレットの上に置かれた。周りには誰もいない。校庭からわずかに聞こえてくる喧騒と、単調な時計のリズムが美術室の静寂を強調していた。

遅々として進まない描きかけの絵を前にして九条周はそつと吐息を吐く。

何故だろう？　今まで絵を描くことで躊躇することなどなかったのに。なぜか筆を進める気になれない。納得がいかない部分があるわけではない。自覚はしている。これは気持ちの問題だ。だけど、理由がわからない。

軽い気持ちで描き始めたこの絵に、なにか、嫌悪感にも似た感情が付きまとう。自分の体の目の届かない場所に、大きな傷跡を見つけたような感じ。一度認識してしまえば意識せざるを得ない、そんな気分。

「……ん

」

同じ姿勢を維持していたせいかわ、背中が少し硬くなっていた。両手を挙げて思いつきり体を伸ばす。ミチミチと背中のスジが伸ばされ、痛みと共に疲労が霧散していく。どうせならこの心のしこりも一緒に解消したい。けど、まあ、それはこの絵を納得のいく完成品として仕上げる他には無さそうだ。リフレッシュ終了。周は再び絵筆を手に取り、キャンバスと対面した。

キャンバスの中には見慣れた風景。暖かい色調から染み出てくる微かな絶望。

やはり、筆が迷う。桃色の筆先が虚空をなぞる。拭いきれない嫌悪感を塗りつぶそうにも、発信源がわからない。

周は小さく舌打ちをした。どうやら長期戦になりそうだ。本腰を入れて、この絵の修正箇所を特定するのが先らしい。それがわかる

までは絵筆の出番は無さそうだ。周は絵筆をパレットの上に放り投げ、さて、どうしたものかと目の前のキャンバスにいつものように意識を集中させる。

「相変わらず、絵を描いているあんたの姿は、何と  
うか不気味ね」

いきなり後ろから聞き慣れた声で失礼な台詞を浴びせられた。もつとも周にとって、この台詞はもう何度も聞かされてきたものだったので、特に不機嫌になることも無く後ろを振り向き、声の主に視線を投げる。

瞬間、世界が赤く塗りつぶされた。

放課後の美術室は、窓から差し込む夕日の光によって赤く染め上げられている。いつの間にか窓際に立っていた彼女の顔は、夕日の逆光によりシルエットが浮かび上がっている。光と影のギャップが激しいのか、彼女の顔は黒く塗りつぶされたような深い洞のようで、表情が判然としない。

周はあまりの眩しさに軽い頭痛を覚え、目を閉じた。視界の暗転。暗幕のようなまぶたの裏で、さっきまで見ていた景色が残像のようにこびり付いている。

夕日を背負っていた彼女。クラスメートで幼馴染でもある彼女の姿が、一瞬で全く人物に変化した。うずくまって大声で泣く小さな少年。色素の薄い赤みをおびた髪の毛、左目を覆う眼帯が痛々しい。周にとって全く見覚えのない少年。だけど不思議と少年の泣き声は、周の胸を執拗に締め付けてきた。

「……？」

わずかな疑問はあったが、周は恐る恐る目を開ける。目の前には先ほどの声の主、クラスメートでもあり幼馴染でもある巡紫月の勝気な顔があった。

「なによ？ 人の顔をまじまじと見ちゃって？ もしかして顔に何かついてる？」

周の探るような視線が気になる。この男がするにしてはおかしな表情だ。

さつき教室で食べた菓子パンの食べかすが口元についているのかわらん？

乙女の常識として、手鏡で自分の顔をチェック。うん、大丈夫。ざっとメイクに崩れがないかを確認して周に向き合う。

おや？ 表情がいつもと同じ、したり顔のにやけ面に戻っていやがる。

「いや、大丈夫だ。いつも通り面白いぞ」  
何だこの野郎。

「あら、ありがとう。お礼にあんたの顔を笑えなくしてやるわ」  
両目をスツと細くして不機嫌な表情を表に出し、わざとゆっくり歩いて周に近づいていく。手がギリギリ届かない距離でいったん停止。おもむろに周から視線を外し、彼の描きかけのキャンバスの隅に置かれているものにヒントを合わせた。

私が注視しているものを見て周が慌てて立ち上がる。

「さて、落ち着け、紫月たん。そんな目でペインティングナイフを見るな。あれは絵の具に対して使うものであって、決して人に向けてるものではないぞ！ はい！ 大きく深呼吸！」

さつきまでの余裕たっぷりのにやけ面も完全に消え失せ、周は微妙に引きつった笑顔を披露している。正直、いい気味であるが、乙女の顔を面白いと表現した罪を償えるほどではない。

しかし、周は大きな勘違いをしている。ペインティングナイフは一応ナイフの呼称を持つものだが、その切っ先はそれほど鋭利ではなく、殺傷能力は低いと言える。見敵必殺のこの場面では少々頼り

ない武器だ。だから、私はそれ自体を武器として使うつもりなどない。

「……安心して。別にそれであんたを刺したりはしない。それを使って、あんたの顔にこんもり絵の具を厚く盛り付けるだけ。今より少しは見られる顔になるはずよ……」

「いや、この絵の具は人体には有毒だからな？ 安心なんて出来ないぞ？」

「当然、知っているわよ」

だからこそ、あんたの顔に塗りたくるんじゃない。

「しかし、それにしても……」

冗談を止めにして、溜息を一つ。周の画材道具を改めて確認する。一目見て、学校から支給されている物とは違うのがわかる。種類のそろった絵筆は専用のケースに収めてあり、絵の具の色の種類も、私が持っているものよりずっと多い。

「あんた……。また家から持ち出したの？」

周の使っている絵の具は、学生には似合わない高価なものだ。一般的には販売されていないプロ使用の絵の具。カドミウムやコバルトを含んでいるため人体には有害だが、やはり市販のものとは発色が違うし、色も褪せにくいらしい。

周が言うには、だが。

もつとも、私は絵の具の品質によって生じる、絵の質の上下などを見極める審美眼などない。だけど、素晴らしい美術作品を前にして、何かを感じることは出来る程度の感性は持っているつもりだ。だから、周が描く絵はきつと素晴らしいのだろう。癪なので本人には絶対に言わないが。

「いい加減、天美さんに迷惑かけるのは止めなさいよね？ あんたにとっではお遊びでも、天美さんにとっでは大事な商売道具なんだから」

「ひどいなー紫月たん。お遊びだなんて。俺、これでも結構マジでやっていんのよ？ それに、これはくれたの。ほら、僕はできた息

子ですから。親からの信頼の証ってやつ？」

「アーソウデスネー。出来た息子の周君は、個展を間近に控えた天美さんのアトリエから、ごっそり新品の絵の具や道具一式を学校に持ち込んでいたな。あと、紫月たん言うな」

「おやおや、そいつは悪い周君だなあ」

周はとぼけた表情で肩をすくめ、苦笑した。

「全く……。少しは反省しろ。天美さんは本当に大変だったらしいじゃない。いざ、最後の仕上げをしようとアトリエに入ったら、仕事道具一式が無くなっているのだから」

「そして、一直線に息子のいる学校に乗り込んできたんだよなあ？」

真つ先に息子を疑うなんて酷い母親だと思わない？」

「いや、当然の判断だ。普段のあなたの素行を知っているなら」

「なんだよー。当然の判断ってー。僕ちゃんのどこが悪いって言うのさー」

「まずその言葉使いを直せ。そして、チャラチャラした服装を正して、そのパツキンの長髪を坊主にして人生を前世からやり直して来い」

「ひどい！ まあ、人生をやり直すウンヌンはともかく、この格好でも別に注意されないのだからいいのじゃね？」

おどけた様子で、余裕たっぷり周は微笑んだ。左耳に付けている色の褪せたリングのピアスが夕日を反射して鈍く光る。その余裕たっぷりの態度が頼もしいけど、その倍は憎らしい。



私立秋里学園。周と紫月が通う県内でも有数の進学高校だ。毎年、多くの学生が名の知れた大学へ進学していくことから、入学する時点で学生はそれなりの優秀な頭脳を求められている。また、私立であることを生かした独自の実験的な学習プログラムを行っており、それが一定の成果を上げていることから、父兄のおぼえがいい。

部活動や地域活動にも力を入れているが、この学校の本分はやはり学業だ。テストや模試の結果は当然のように、上位五十名の名前は廊下に張り出されるし、優秀な生徒だけで編成された選抜クラスというのも存在する。ようは、公然と成績で学生のランク付けを行っているのだ。この制度に反感を覚える生徒や父兄はいることはないが、実際は少数派だ。この学校は堂々と教育プログラムを世間に公開しているし、そのことを知ったうえで、誰もがここの門戸を叩いたのだ。ある種の覚悟を持って。

しかし、逆を言えば、この学校におけるイデオロギーは『テストの点さえ良ければそれでいい』である。極端に言えば、テストや模試の結果が良ければ、授業に出なくてもいいのである。もちろん、ほとんどの生徒は真面目に授業を受けているし、自主的な勉強にも励んでいるのだろう。だが、どんなことにも例外があるように、ほぼ授業を受けなくても、常に成績上位に位置する生徒がいるのも事実だ。

九条周はそんな例外的な学生の一人だった。

周の肩までかかる髪は脱色を繰り返かえし、金髪よりも白金と言った方がわかりやすい。今は絵を描くためか、後ろで無造作に結わえている。そのため、彼の左耳のピアスがひどく目立つ。学校指定のタイはだらしなく緩め、ブレザーの袖は乱暴にまくつてある。ブランド物ベルトには無駄に鎖の多いシルバークロスが付いている。履いている学

校指定の内履きは踵を踏み潰していた。正直、おしゃれかだらしいかは微妙なラインだ。だが、進学校であるこの学校ではかなり珍しい格好なのは間違いない。誰がどう見たって真面目な生徒の格好には見えない。実際は、多少着くずしてそれなりに見える格好をしている生徒は何人かいるが、どれも彼ほどの本物の『不良』はいない。

それに、周はその格好に伴って、精神性もかなりの『不良』だ。まず、ほとんど真面目に授業を受けたためしがない。当たり前のように遅刻してくるし、授業に出席していても、その大半は机に突っ伏して寝ているか、周りのクラスメートと無駄話に興じていたりする。登校すらしてこない日も多々ある。彼が雀荘や、パチンコ店に出入りしていることは、教師も含め、周知の事実なのだ。それに、夜中に駅前の繁華街で顔を赤くして歩いている周の目撃情報や、彼が酔っ払った大学生と喧嘩になり補導されたなど話題は事欠かない。いわゆる素行不良。問題児。

当たり前だが、周は学校の先生にはおぼえが良くない。だが、ほとんどの先生は彼の生活態度に強く注意はしてこない。つまりは学力。周は授業をほとんど放棄していながら、一学年一クラスの選抜クラスに在籍し、あまつさえ常にテストで上位三組に入ってしまうのだ。彼の待つ免罪符の効力は、この学校においては非常に強力だ。彼の頭脳はそのままこの学校の実績の向上に直結している。学校経営の視点から言えば、周は間違えなく主力商品の一つである。だから、彼を保護するならともかく、切り捨てることはできない。

ただ、周はそんな自身の有能さにさほど関心がないようだ。気に入らなければやらないし、好きなことは他の時間を削ってでも徹底的にやる。そんな信条は、彼のまとう空気に光の粒子を含ませる。周は誰よりも自由で、誰よりも身軽だった。謙遜も緊張も誇張もない彼の性格は、周りのクラスメートには目が痛むほど眩しいらしい。嫌味なほどできる周は、決して嫌われることなく、憧憬の視線を一身に浴びてクラスに溶け込んでいる。

だが、幼馴染である紫月が周に抱くイメージは、他のクラスメイトとは違うものだ。彼女が周を見たときに感じる違和感。それは『チグハグ』だ。周の格好、精神性共に何かが一つづれているように感じるのだ。幼馴染である彼にそんな思いを抱くようになったのは、何時からなのかはわからないのだが。

「それで？ 今は何の絵を描いているの？ て、ゆーか。あんたが絵を前にして悩んでいるなんて珍しいわね」

そう言つて、私は周の背後にあるキャンパスを覗き込んだ。油絵の具独特の揮発性溶油の匂いが鼻につく。わずかに顔をしかめながらキャンバスをじっくり眺めた。

不意に、胸に去来した喪失感に戸惑いを覚える。目の前の絵を見て、何かが間違つていると、心が叫ぶ。この絵からにじみ出てくる絶対的な違和感。この感覚は本物だ。なのに、私はその間違いが何処なのか判らない。別に判らなくてもいいとは思えない。だってこの絵は、この絵の題材は

「これつて、近所の交差点？ 坂の下の？」

キャンパスの中には見慣れた風景が広がっていた。小高い丘の上から、傾斜のある坂道を見下ろす構図。季節は春なのか、坂道にそつて並ぶ桜並木は満開だ。風は吹いておらず、舞い落ちる花びらが、木漏れ日の中キラキラと瞬く。光と影の薄いグラデーション。桜の木自身の木陰に、わずかな光の柱が乱立している。薄皮一枚の現実味を残した、どこか幻想的な絵だった。

周の描く絵はいつもこうだ。陽の光で生まれる影の長さも、普段は気にもとめない電線の弛みも、細かなパーツはいつそ神経質といえるほど忠実に再現している。だけど、最終的に完成した周の絵は、どこか現実味が薄く感じるのだ。決して交わらない現実と虚構。その違いが何なのかを紫月は具体的な言葉に出来ない。だが、感じることは出来る。

綺麗過ぎるのだ、周の絵は。

輪郭が滲む暖かな光で構成された周の世界。肌寒い美術室の中でも、その絵の周りだけは春の陽光を感じることが出来る。澄み切った青い空。ゆっくりと舞い落ちる桜の花びら。この絵の前に立って

いると、陽気だけではない、春めいたにおいも感じてしまう。

だけど、温かい町並みに人の姿は皆無だ。坂道に敷き詰められた花びらは、靴に踏まれ、泥にまみれることなく、その美しさを保っており、坂道はまるで桃色の絨毯を敷き詰めたようだ。

まるで、現実を拒否するように。

「いやな、なんかこの絵に対して、微妙な違和感があるのだよ」  
周にしては珍しい、眉間に皺を寄せた表情で、キャンパスを睨んでいる。

「違和感……ねえ」

曖昧に、ごまかすように呟いた。確かに私もこの絵に対して何かを感じたのは確かだ。だけど、この絵に抱いた感情は違和感なのでは到底説明できない。

……強い言葉を借りるなら、この感情は『絶望』だ。何か取り返しのつかない物がこの絵には描かれている気がしてならない。

だけどそれを口に出すことは出来なかった。口にしたら最後、何か大事なものが崩れる、そんな気がしてならないのだ。理由はわからない。だけど心の奥、強いて言うなら本能が警告を発している。それに気付いてはならない、気付いたら最後私はきつと後戻りできなくなる。

「とりあえず、現場で見比べればいいじゃない。どうせ帰るときこを通るでしょ？ 私達」

早くこの絵に関する話題を終わらせよう。そう考え、私は毒にも薬にもならない折衷案をだした。

どっちつかず。らしくない自分に、心の中で苦笑する。

「あー……。そうだな。そうしますかー」

そう言って、周は画材道具を片付け始めた。納得のいかないまま、絵を描き進める気はないのであろう。さっきまでの厳しい顔は完全に消えうせ、能天気な顔をして口笛を吹いている。

「そう言えばさー。なんで紫月さんは美術室に来たの？」

思い出したように、周はたずねてくる。

「だから、紫月たんいうなつての。まったく……。あんだ、今日みんなど遊ぶ予定があるのを憶えている？」

「もちろん。当たり前だろー？ 明日から中間テストの勉強期間が始まるからな。今日ぐらいみんなで派手に遊ばーぜ。なに？ 俺が予定を憶えているか確認？ 不安になっちゃたの？ もしかして俺が忘れてこないんじゃないかと？ この、寂しがりやのウサギちゃんめ！」

ゴスツ！ 思わず振り下ろした手刀が、周の脳天で鈍い音を発した。

「いったーい！ 紫月さんの横暴！ 照れ屋さん！」

響いた音のわりには周にダメージはないようだ。むしろ嬉々として紫月をおちよくってきた。勝ち誇った顔がかなりむかつく。見ると振り下ろした右手は赤くなってジンジンと痺れいていた。痕が残ったらどうしてくれる。

「うるさい。だまれ。それ以上騒ぐなら今度は喉を潰しにかかるぞ。

大体、あんた予定は覚えていても、集合場所と時間は

わかっていないの？」

「いや、知らないよー？」

逡巡も恥じらいもない周の返答。

「帰りのホームルームに出席しないからだぞ。とりあえず今から教室に集合つてことでよろしく」

「ん、了解。……てゆーかさ。メール送れば済む話じゃない？」

そう言いながら、ついでのように周はメールチェックを始める。

「……あんたは絵を描いていると、メールや電話に気付かないことが良くあるじゃない」

「んー……そうだった？」

「忘れたとは言わせないわよ。前科何犯だったのか数えるのも億劫なんだから」

全く困った奴だ。子供が持つ悪気のない自己中心性。大人に近づけば近づくほどに、磨耗していく無垢な情動。それを周は当たり前のように行使する。まるで出来の悪い弟を持ったみたいだ。

「過去を振り返っても良くないぜ、紫月たん。人間は未来を見て成

「長ずる生き物なのさ！」

「過去を振り返って後悔しないってのには賛成だけど、反省しないで同じ失敗を繰り返すのは愚の骨頂なのよ」

「ふふふ、甘いな紫月たん。俺が学習しないとでも？ そうやって怒った紫月たんの顔を見ることは既に俺の生活サイクルの一部に組み込まれているのさ」

「嫌な方向に学習してんじゃなーよ」

繰り返したローキックは、あっさりよけやがった。むき、生意気な。

「ほらほら、じゃれ付いてこないこない、さつさと教室いこーぜ」

そう言って、周は鞆を持ってドアに向けて歩き出した。非常に不本意な展開だがしょうがない。実際、美術室の時計は予想していた時間よりもかなり進んでいた。

いそがなくちゃ、そう思い、忘れ物がないか後ろを振り返る。

夕暮れの美術室。秋が深まり、日が沈むのが早いのだろう。さつきまで室内を染め上げていた赤色に黒色が滲み始めていた。

部屋の真ん中には先ほどのキャンバスがぼつんと立っている。薄暗くなり始めた室内で、そのキャンバスだけ春の陽光に溢れいている。

「ちょっと周、絵が出しっぱなしに

「あー、別にいいよ。絵は人に見られてこそ価値が」 「わかった」

真っ直ぐ周の絵を見つめる。ああ、なんだ。こんな簡単なことだったのか。胸の中にあつた心のしこりがゆっくり氷解していくようだ。

「わかったって何が？」

「違和感の正体」

そう言って、私は絵の中央部分を指差した。坂の上から見下ろす構図。下っていく坂道はちょうど絵の真ん中当たりで十字路に出ている。サクラの花びらと光の粒子が舞い散る中、そこに一つだけ違う色が光っている。



赤い光。基本的に淡い色で構成されている絵の中で、異物のように赤い目玉。

「ここ、この交差点。実際は信号機なんて付いていないじゃん」  
なんでこんなことを見落としていたのだろう？ 不思議でならなかった。いつそ不気味と言ってもいいほどの禍々しい赤信号。それが我が物顔で絵の中央に鎮座しているのだ。紫月も周も通いなれた道だ。なのに、二人そろって見落としている。そのことがどうにも納得できない。

ああ、きつと夕日の赤のせいだ。そうに、違いない。  
「そう……か。ああ……。そうだったな。あそこに信号が建つことはなかったな」

どこか呆けたように周はつぶやく。

「らしくないわね。あんなものを見落とすなんて。そろそろ脳みその衰退期なんじゃない？」

「んー、そうかもね」

気のない返事、自失した周の表情。その目はどこか遠くを見ている。

「……？」

私はそんな周の態度を少し不審に思ったが、軽くなった心はすぐにそれを忘れさせた。

「おい、紫月さん、周。今から教室に行くのか？」

後ろから自分を呼ぶ声に周と一緒に振り返る。

「おーっす。沖君。そっちも終わり？」

こちらに歩いてくる沖君の髪の毛は、まだ湿り気をおびている。

彼が近づくと、学校のプール独特の塩素の匂いがした。

「うん。テスト明けだからね。ミーティングと軽い練習だけ。泳ぎ足りないって顔をしている部員もいたけど速めに解散した。今日はこっちが優先だし」

体に、心地よい疲れを感じているのだろう。目をトロンとさせて、沖は大きく伸びをした。

「なーに？ 部長権限ってやつ？ 沖も大概悪いやつだなあ」

いや、沖君もあんたには言われたくないでしょ。その台詞。

「いやいや、普段は責任って奴を背負っているんだから。これくらいの権限はあつてしかるべきでしょ」

「ふーん。どちらにせよ、次の大会で成績を落とすようなら、男子水泳部の部費は容赦なくカットなんでヨロシクウ」

「おいおい、聞きました？ 沖部長。今の生徒会長殿の発言？」

「聞きましたよ周君。身震いしたね。権限振りかざしているのはどつちだよ？ この、鬼！ 悪魔！ 独裁者！ 女帝生徒会長！」

「何とでも言いなさいな。見込みが無いところに投資をしないのは当たり前でしょ？ そうならないように、せいぜい水泳部の商品価値を上げることね。部長さん？」

目を猫のように細めながら、意地悪く発言してみた。

「周。お前の幼馴染はどーしてこう、高飛車なんだ？」

「うーん、いつの間にかツン期にはいつているのだよ。どこでルー卜選択間違ったのかわからん」

なによ、ルー卜選択って？ 人をゲームキャラクターと混同すん

な。

「なんだよ、周！。選択間違えんなよー。このままじゃ紫月さんルートはバットエンドじゃないか」

「つーか、沖君。普通にこの話題に乗ってきたわね。」

「大丈夫だ。沖、安心しろ！ きつとくるさ……紫月のデレ期が！」「そうだったな、周！ 俺が間違っていたよ。まずは信じてことだ。紫月さんに……他者を慈しむ心の欠片が残っていることを！」

「何気に沖君が酷いことを言っているのは気のせいかしら。て、ゆーかそろそろこの茶番を止めよう。こいつらほっとくと際限なく調子に乗るから。」

「いいか、沖。思い浮かべるんだ！ 紫月のデレデレな様を！」

「あ、まだこの話題続くんだ。」

「了解だ。周！ 俺達には妄想……もとい想像力がある！」

「そう言っつて、二人はそろって目を瞑る。顎を上げこころもち顔を天に向けている。意識は遙か遠く、忘我の彼方へ。」

「あー、男って本当に馬鹿だなあ。」

「……うえっぶ」

「……俺は今想像力の限界を知ったね……」

「どっちがどの台詞を言ったかは割愛。だって二人ともバットエンド直行コースにご案内だから。」

「いい度胸ねえ、二人とも。本人を目の前にしてさあ？」

「ひいひい！ 紫月たんがこわい！」

「いやあ、ちよつとした冗談だよ紫月さん。本気にしないでよー」「あー、私の中では男子水泳部の部費カッターが冗談から現実になりつつあるんだけど？」

「ごめんなさい、紫月様。この通りですから許してくださいまし」  
床に頭をくつつけそうな勢いで、沖君が頭を下げる。その横では周が、「えー、沖、弱すぎー」と文句を言っている。

「うむうむ、今回だけよ？ 沖部長さん？」

人に頭を下げさせて悦に入っている自分は、我ながら中タイイ性

格だと思つ。

ところが実際の話、私の言った部費カットはあながち冗談ではない。生徒会長として学校の運営に携わっているのだ。成績の良い学校のウリとなるような部活動に多くの部費が流れるのは仕方がない。例え、同じクラスの友達が部長をやっつていようが、そこに私情を挟むようなことは絶対にしない。沖君のほうもそれを良しとしない人間性を持っている。ようは二人とも友情は大切にしているが、馴れ合いは好まないタイプなのだ。

まあ、そんなことにはならないでしょうけど。

私はちらりと隣で歩く沖君の横顔を見た。背の高いがっちりした体格。整えた眉の下にある目は若干たれている。この目のせいだろうか？ 沖君のまとう雰囲気はどこか緩く、安心できる。

現実には、この頃の男子水泳部の躍進は、すさまじいの一言に尽きる。これまでもそこその成績を残している部ではあったが、記憶と記録に残るほどではなかった。しかし、沖君が部長に就任した途端に状況が一変した。

沖君が部長に就任したタイミング。それは、三年生の先輩達が引退したタイミングと重なる。

それまでレギュラーだった三年生が全員引退し、ベンチウォーマーだった沖君達二年生が表舞台上に上がってきたのだ。そして彼らがレギュラーとなっではじめての県大会。そこで披露した記録はすさまじい。

記録を更新した競技は三つ、表彰台の独占したのは二回。それまで県大会レベルでは相手にされていなかった我らが水泳部は、一躍全国レベルの大会でダークホースとして扱われることになった。全国放映のテレビでもちよつとした特集を組まれるほどに世間を騒がす結果となったのだ。

無論、学校内でもちよつとしたお祭り騒ぎとなった。勉強第一の

我が学校でも、スポーツが出来ないよりは出来た方がいいに決まっている。この頃、放課後の屋内プールには男子水泳部の練習を見学する女子学生を多く目にするようになった。水泳部員がプールに飛び込む度に、キヤー、キヤー、黄色い声援を上げている。

一度、沖君が部員達が練習に集中できなくて困る、と言っていたので、

「じゃあ、部員意外立ち入り禁止にしようか？ 何なら今日からで出来るけど？」

と、私なりの親切心で言ってみたら、

「いや、さすがにそれは悪いよ。向こうも悪気があるわけではないし、大体応援に来てくれている人に、そんな酷い事は出来ないよ」  
なんて言いやがった。

？酷い事？ってどういう意味よ？ 少々むかついて沖君の顔をよく見ると、頬が少しにやけていたのを私は見逃さなかった。

そんな水泳部の躍進に肩身の狭い思いをしている人達もわずかながらに存在した。

引退していった三年生達だ。それもそうだろう。彼等が引退してレギュラーの座を後輩に譲ったとたんに水泳部は大躍進したのだ。当然のように、彼らは実力のある後輩を認められなかった器の小さい先輩というレッテルを貼られたのだ。

掲げられたレッテルは様々な憶測を生む。

曰く、男子水泳部の三年生は、練習もせずに先輩権限でレギュラーになっていった。

曰く、自分より実力のある後輩に苛めを行い、部から追い出そうとした。

噂話は縦横無尽に学内を駆けめぐり、人と人とを悪意の糸で結び付けていった。悪意を共有した人間は軽い気持ちで残酷に振舞う。まったく関係のない第三者から、向けられる悪意の針。一時期、水泳部の先輩方は文字通り針のむしろだっただろう。

そんな噂話を誰よりも不快に感じ。真っ先に反論したのは他でもない沖君である。

あの日、最早学内では伝説として語り継がれている全校集會が行われた日。

県大会の個人メドレーで優勝した沖君は、賞状授与のため壇上と呼ばれた。壇上に上がった沖は、やおら校長先生の前に設置してあったマイクを取り上げる。あまりにも突飛な沖の行動に、誰もが言葉を失い、思考が停止した。空白の数瞬、このとき不思議なことに誰も彼の行動を止めようとはしなかった。

かくいう私も生徒会長という立場でありながら、見惚れる様に舞

台袖から成り行きを見守っていた。まるでシナリオがある舞台。虚構と割り切れるテレビのワンシーン。

沖君は振り返り、真っ直ぐに全生徒を見下ろし喋り始める。

「僕が今日この場に立てていることは、他でもない未熟だった僕をここまで鍛え上げてくれた先輩達です」

沖君はそこでいったん言葉を区切る。わずかな逡巡の後、一瞬、泣き顔のように彼の顔が歪んだ。軽く咳払いのをして、沖君は話を続けた。

「……いま、この学校内で、非常に無責任な噂が流れていることを僕は知っていますし、みんなも耳にしているはずです。正直、非常に不愉快です。根拠も何もない、憶測と嘘で塗り固められた噂です。どうか、お願いですから、あの噂を信じないでください。何も見えないのに、知らないのに、見ていたように、知っているように話さないでください。お願いします」

沖君は壇上から、生徒達に向けて深々と一礼した。長い沈黙が体育館を支配する。なかなか顔を上げない彼の態度は楔のように、体育館の時間を捉えて離さない。停滞した時間を動かせるのはただ一人であることを、生徒、教師共々、強制的に納得させられている。

沖君と同じ壇上にいる校長先生が、出番を間違えた役者のようにおろおろしている。ちらちらと、舞台袖の私に視線を送ってくるのが煩わしい。恐らくこの状況を止めさせたいのだろう。気持ちはわかるが私には無理。私は皆が注目している舞台を壊すような無作法な振る舞いはしたくない。なにより、私自身、舞台に引き込まれてしまった観客の一人なのだから。

忘れた呼吸を息苦しさで思い出した頃、突然、沖君は顔を上げた。動き出そうとする時間。張り詰めていた空気が揺らぐ。みんなの緊張が途切れようとするその刹那、狙ったように沖君は言葉を滑り込ませた。

「最後に、先輩方、今までありがとうございました！」

「……ありがとうございました！」



沖君の言葉の後に、体育館のあちこちから声が重なる。おそらく他の男子水泳部員の声だろう。再度頭を下げた沖に倣うように、立ち上がり深々とお辞儀をしている。部員達が頭を下げる方向には、三年生達が座っている区画だ。先輩達は呆気にとられ、虚脱した顔になっていた。

静寂が支配する体育館の中で、パラパラと拍手が寂しく鳴り響く。徐々に、引き込まれるように複数の拍手が音を重ねてゆく。始めはゆっくりと。しかし、身震いするほど加速を伴って拍手の奔流が体育館内で氾濫する。まるで決壊したダムのように。割れんばかりの拍手と歓声が体育館内で反響し、まるで水の中にいるようだ。

耳にへばりついて音の残響が遠近感を曖昧にする。

出来すぎた舞台のような演出が現実感を希薄にする。

まるで水の中から外の世界を覗いている気分。水面から覗く向こう側の世界では、件の先輩達の泣き顔が見える。誤解が解けた喜びからか、許された安堵からか。それとも、ほどこしを受けた屈辱からか。

鈍った思考と感覚が私を包み込む。だけど決して不快ではない。

寒い日にぬるめのお風呂にいつまでも浸かっていたい、そんな気分。ふと、壇上を見ると沖君がいつの間にか顔を上げている。生徒達の喝采を一身に浴びながら、彼は小さく頷いた。

教室に入ると、床にうつ伏せで大の字に寝ている女子生徒がいた。

「……なにをしているの？ ゆっこ？」

「うー、床がちべたくてきもちいーぜ」

「お腹冷えるよ？ っーかその格好で足広げんな。てめーらもチラチラ見てんじゃねー」

沖君は顔を真っ赤にして、ぶんぶんと顔を横に振って否定する。

しかし悲しいかな。健全な男子高校生の目は、彼のプライドに反して、ちらちらとゆっここの内腿に引き寄せられていく。

反対に、周は臆することなく堂々と見ていやがる。そして呆れるように、深く溜息をついた。

「ゆっこちゃん、一つだけ忠告しておこう。短パンは……反則だ」

まるで手酷い裏切りを受けたかのように、その表情は深い悲しみに満ちている。神の言葉を借りる牧師のように、幼子を諭す老人のように、訥々と周は穏やかにゆっこを諭す。

「いいか、ゆっこちゃん。完成された芸術品には余計な装飾はいらないんだよ。女子高生＋ブレザーの制服。この組み合わせは単純かつ明快な価値観を伴った完成品だ。黄金比で構成されているといってもいい。例外がある？ ああ、認める。認めるとも。確かに、メガネや紺ハイ、ルーズソックスに各種アクセサリー、これらのオプションによつて、に多くの価値観が生まれるのは確かだ。ただそれは些細だ。そう、とても瑣末なことではしかないんだよ。他にも髪型やら、夏服、冬服といったバージョン違いなども言及できるかもしれない。でもそれを今語ることは、重箱の隅を突つつく事と同義と言つてもいい。やられた方はイライラするし、やっている方も嫌がらせ以外の何物でもない非生産的な行為だ。今言及すべきことは唯一つだ。そう、短パンだ。君達が体育の時間に履いている学校指定の短パンだよ。女子高生＋ブレザーの制服＋短パン……いや、あり

えないだろ？ 価値観半減どころではないよ？ むしろあれだ、悪意さえ感じるね。……だが、大丈夫だゆっこちゃん。まだ逆転の目はある。大丈夫、俺を信じるんだ。簡単なことだ、発想の転換だよ。その短パンに価値を持たせれば良いだけだ。いいかい？ 今の世ではオーパーツとまで言われ、我が高校でも伝聞にのみ語り継がれるリサールウェポン……ブルマを手に入れグガキイ！ フェ……」

半ば予想していた展開だったので、後ろからげん骨で周の後頭部をぶっ叩いた。瞬間、変な音が周の口から響いた。生理的に受けつけない、本能が忌避する音に体温が一、二度下がる錯覚に陥る。

恐る恐る周を見ると、勢いで舌をかんだらしく、顔をしかめ口元に手を当てている。注意してよく見ると目尻がうつすら涙がたまっていた。隣で一部始終を見ていた沖君も痛そうな表情をしている。

まあ、確かに聞いたただけで鳥肌が立つような嫌な音がしたし。実際、私もその音を聴いた瞬間、「あ、やりすぎちゃった……」って思ったし。いつもは軽口で言い返してくる周は黙ったままだし。

……あ、痛みに堪えられないのか、周がその場で膝をつく。白金の長髪が俯いた周の顔を隠し、どんな表情をしているのかわからない。

。教室が嫌な静寂に包まれる。沖君は心配そうに周の顔を覗き込んでいる。立場的に加害者である私は、謝るのにも弁解するのにも微妙に自尊心を刺激してしまい、その場を動けずにした。ちなみに、ゆっこはこの事態を気にすることなく、目をトロンとさせ、半ば夢の世界に移住しているようだ。そのマイペースさ加減、心底羨ましい。

しかし、やっぱり私が謝るのがスジだろう。たとえ、どんなに周がセクハラ発言をしたとしても、怪我をさせていい理由にはならない。うん、まあ、正直心のそこから謝ることは出来そうもないけれども。一つ私が大人の対応をいたしましょう。

「ごめん、周。やりすぎちゃった。大丈夫？」

周の肩に手を置き、顔を覗き込む。しかし、周は私の視線を避け

る様に顔を逸らした。

やばい、周の奴本気で拗ねてやがる。こんな反応されるのは久しぶりだ。小さい頃ガキ大将だった私にいたずらされた時、周はよくこんな態度をとっていた。口には出さないが全身で不満を訴えている。ちよっかい出されるのは嫌だが、かといってほっとかれるのも嫌だというどつちつかずの心模様。正直、幼かった私達は苦笑しながらも扱いに困っていたのを思い出す。懐かしい記憶が喚起され、自然と口調が優しくなるのを感じる。

「ごめんね、周。まだ痛む？ 機嫌直して？」

周のほほに手を当て、優しくこちらに顔を向けさせようとする。しかし、周はむずがる子供のようにいやいやと首を振って向き合おうとしない。

「……ごめん、周。謝るから。こっち向いてよお」

普段の自分からは考えられない甘い声をだして、周のほほに顔を近づける。

「……本当に悪かったと感じている？」

ボソツと、私の目を見ないまま周が呟く。

「うん、もちろん。だから、ね？ 機嫌直して？」

ためーも反省する部分が多分にあるだろーが。と、言いたい衝動をぐっと堪えて笑顔で応える。

「じゃ……して……す」

「うん？ 何々？ よく聞こえないよ」

途切れ途切れに聞こえてくる周の言葉を良く聞き取るうと、彼の口元に耳を近づけた。

「じゃあ、チューしてくれたら機嫌直す」

「何言ってるやがる！ この万年発情猿があー！」

激情に任せて、周の顎を拳で打ち抜いた。先ほどよりもいっそう破壊的な音が教室に響く。盛大に机や椅子を巻き込みながら後ろに吹っ飛んだ周は、口元に手を当てて芋虫のように床で悶えていた。

「うお、マジいてえ！ ガチだガチ！ 今度はガチで舌を噛み切り

そうだったんですけど？ 紫月たん！ 乙女が全力でアッパーカットを行うのはいかなものなのかなあ！」

「うるさい。黙れ。喋れるな。呼吸するな」

腹立たしい。周の悪ふざけもそうだが、それにだまされて優しい言葉をかけてしまった自分がなおいつそう腹立たしい。

「全く……。なんでこいつはこんな性格になっちゃたのかしら」

小さい頃は、もう少し素直な奴だったのに。

「いやあ、紫月さんが甘やかしているからかと……」

それまで黙って成り行きを見ていた沖君が全くもって理解不能な発言をする。

「はあ！？ 何言っちゃっているわけ？ 沖君は？」

「……いやあ、だつてねえ……」

「無駄だよ、オツキー。紫月は自覚ゼロだから」

見ると、いつの間にか仰向けからうつぶせの状態に移行していたゆっこが頬杖を突きながらこつちを見て言った。

「なによ、ゆっこ。私のどこが自覚ゼロだつていうのよ？」

「いやあ、そんな質問が出る時点で自覚ゼロってことじゃないですか？」

「む……」

ゆっここの言葉の意味は分かるが、結局、私が何に対して自覚ゼロとなのがわからない。明らかにしたいけど、何かが癢に障る。例えば、一步引いた位置で私達二人を見ている沖君とゆっこの表情とか。なによ、その微笑ましいものを見ているような表情は。微妙に上から目線を感じてちよつと不愉快じゃない。

「まあ、いいわ……。いや、決してよくはないけど。とりあえず急ぐわよ。カラオケの予約時間に間に合わなくなっちゃう。おら、起きる周。いつまでも痛がつてんじゃねーよ。男でしょ？ 一応」

いまだに床で悶えている周を引っ張り起こす。足腰に力が入らないのか、周は私の肩につかまるように立ち上がった。先ほどの私の拳は綺麗に周の顎先を打ち抜き、程よく周の脳みそをシェイクした

ようだ。

「ほら、しゃんとしなさい。自分の足で立つ」

「いや、紫月たんが元凶だからね？」

「自業自得。言い訳するな。男だろ」

「紫月たんは、もう少しおしとやかに女の子らしくするべきだと思  
う……」

「……二人ともー。今日は周のおごりだつて。遠慮なく騒ぐわよ  
くるつと、百八十度急旋回をし、後方にいた二人に声をかける。  
私という支えを失った周は、再度無様に床に伏した。

「ちよつと、紫月たん？ 俺はそんなこと一言も言つてないよ？」

「お、ラッキー。ごちになりまーす」

寝っころがっていたゆっこが無駄に捻りを加えながら飛び起きる。

「ほらさつさと歩こうぜ。財布が遅れてどうするの」

沖君も鞆持つてすでにスタンバイ。自然な風に自分の立ち位置を  
有利にするその嗅覚はさすがだ。

「俺、お前らが友達だということが、激しく疑問なのだが……」

「あらあら、なぜか財布が喋っているわ。不思議なことがあるもの  
ね」

さて、財源は確保できたことだし、テスト明けの放課後を思いつ  
きり楽しみますか。

三時間後、駅前のファミレスには気怠い弛緩した空気が漂っていた。抑え気味の光源が店内に薄い影を落としている。耳をくすぐるような談笑と、それを縁取る静かな音楽。少し効きすぎと思える暖房に、紫月は軽い微睡を覚えた。

「いやー、歌った歌った。久しぶりのカラオケだったけどやっぱり大声で歌うのは気持ちいい」

満足そうに喋るゆつこの前には、200グラムステーキのディナーセット。ライスは大盛り、追加でポテトフライとジャンポパフェ、ドリンクバーのお替りは五杯目、見ている人の胸やけを誘う暴力的なラインナップ。

明らかにお財布に優しくない。

これだけ食べても崩れないゆつこのスタイルを見ている私の心情は、乙女的に非常によくはない。

目の前のシーフードサラダをもそもそ山羊のように咀嚼し、ブラツクコーヒードで流し込む。

ふと目の前を見ると、周が頬杖をついてぼんやりと外の景色を見ている。気持ち目を細めるようにして、訝しげに、探るような視線だ。いつもなら率先して場を騒がす彼らしくもない態度に少し違和感を感じる。不思議に思っただけの視線の先を追ってみても、いつも通りの夜の街の風景が広がっているだけだった。

「何？ 何か見えるの？」

「ん？ いやあ、なんか眩しくね？」

何を言っているのだろうこの男は。意味が分からず、窓の外の風景に目を凝らしてみる。なんら変わらない普段通りの夜の街。特別眩しいとは思えなかった。

「いつも通りじゃない。どこが眩しいのよ」

「いや、だから……。はて、どこなんだろうな？」

どこか納得のいかない表情で、不思議そうに顔を傾ける周。その表情を見て、紫月は少し周りの温度が下がった気がした。心の奥底普段は目も向けていないほど深い位置から、なにか、得体のしれないものが湧き上がってくる。目を背けるように、あわてて自分の内側から目をそらした。

「さーて、そろそろ帰るべーよ」

「そだねー、明日も早いし」

ゆっこの提案に沖君が同調する。店内の時計を見ると、まだそんなに遅い時間には感じられない。正直まだまだ遊び足りないが仕方がない。この二人は朝練があるから早起きなのだ。

「うっし、じゃあ帰りますかー。ほら周、会計よろしくー」

「「ごちになりまーす!」」

「本気で払わせるんだね、君たちは……」

自宅近くのバス停に降りると、夜の湿った空気が肌にまとわりついてきた。その後、電車通学のゆっこと沖君とは駅前で別れ、バス通学の周と私は、ちょうど駅前のバス停に停車していたバスに乗ったのだ。

ちょうど坂の頂上にあるバス停から、見下ろす形で私と周の家が見える。向かい合うように立つお互いの家はどちらも煌々と暖色の明かりをともししており、私達二人の帰りを待っているかのようだ。

そして、私たちの家のさらに向こうに続く坂の底には、白色に輝く街灯の点線が十字に交わっている。ただ、そこには赤色の光を放つ信号機は存在していない。その事実には、私は露骨に安堵感を覚えた。

「ほら見なさい周。あの十字路に信号機なんてついていないじゃないの」

十字路を指さしながら、二人で坂を下っていく。私たちが住んでいる住宅街はめったに車が通らないのでとても静かだ。夜の澄んだ空気を胸いっぱい吸い込む。その冷たさとかすかに聞こえてくる



虫の音が、普段意識しない秋の深まりを思い出させた。

「んー、そうだねー、やっぱりおれの記憶違いかー」

あっさりと自分の間違いを認める周の声は、少し遠くから聞こえた気がした。横を歩く彼の顔を盗み見る。何も読み取らせまいとする、無機質な表情がそこにはあった。何かを隠している、それはわかるのだが、あえて踏み込んで聞くことはできない。幼いころは距離を感じなかった彼我との差は、年を経ることにひらいていく。今はそれが少し残念だった。

「それじゃあね、明日はちゃんと学校に来なさいよ」

自宅の門扉に手をかけながら周に声をかける。

「おー、気が向いたらねん」

「あんたね……。そんなことじゃ、大人になったとき後悔するわよ？」

「大人になったら……ねえ」

周の声のトーンが一段下がる。振り返ると、嘲笑うような酷薄な表情で周は私を見ていた。

「紫月さんはどんな大人になりたいのかなあ」

「どんなって、……正直まじめに考えたことないわよ」

嘘だ。私にだってほんやりとだけど、なりたい大人像はあるような気がする。が、そんなこと気恥かしくてとても言葉にできない。それに。

「それに、いつかは必ず大人になるんだから」

空々しい台詞が、夜の冷たい空気を一層冷たくした気がした。

『いつかは必ず大人になる』、いつから私はこの言葉に希望以外の感情を持つようになったのだろうか。いつから私は。

「そういう周はどうなの？ どんな大人になりたいの？」

「こんなに憶病になってしまったのだろう。」

「俺？ そんなの昔から決まっているじゃん」

「え、嘘。何々、何になりたいの？」

思ってもみななかった周の返答に少し焦燥を覚える。周は目を猫のように細めながら笑っている。青白いに夜の光に照らされた周の金髪は、淡くぼやけて現実味を消失していた。

「紫月たんのお嬢さん」

「……………」

「昔約束したじゃん？ 頑張って働いて俺を養ってね」

「あ、あんたねえ……………！」

返せ、さっきまでのメラニコリックな私の気持ちを返しやがれ。

あのころの約束なんて無効に決まっているでしょ！

「それじゃあ、おやすみ、マイハニー紫月たん」

いたずら好きの悪戯鬼そのままの表情で、周はさっさと自分の家に向かって行ってしまった。

ため息ひとつ、やり場のない気恥ずかしさを鎮めるように気急ぐ夜空を見上げる。

夜空はいつものように、目を潰さんばかりの満天の星空だった。

~~~~~

見慣れているけど違和感たつぷりの自宅の玄関に立ち尽くす。自宅という自分の匂いが染みついていないはずのテリトリーにいるのに全く安堵感が得られない。

硬く冷たいドアノブを掴む。

その先の広がっている風景に恐怖し、周は、目を閉じたまま玄関を開けた。

## 巻

バスから降り、顔を上げると、覆いかぶさるように灰色の雲が迫ってきた。しまった、帰るころには雨が降るかもしれない。燈火は心の中で軽く舌打ちをした。鼻につく空気の匂いの湿っぽさに確信を覚え、一瞬、通学路の途中のコンビニで傘を買うことを考えたが、尻ポケットに入っている小銭入れの軽さを思い出し、濡れても構わないと自分に言い聞かせた。

バス停から駅前のアーケード街を抜けた先に、燈火の通う高校はある。普通に歩いてても十分かそこから到達できる距離だ。腕時計で現在時刻を確認した燈火は、意識してゆっくりと学校に向かうことにした。

日の光を遮る曇天は、秋のアーケード街を廃墟のように装飾する。あまりにも薄暗いからだろう。朝の時間帯だというのに、ほとんどの店内には明かりがともっている。それがあまりにも物悲しいからだろうか、行き交う人々はみな一様に口を閉じ黙々と歩いていた。自意識を排除して何かの義務のように流れる人の波。そこに燈火はそっと紛れ込む。アーケード街に流れるあまりにも場違いな明るい音楽に、白けた気分を助長させながら。

「おつす、燈火。おはよーさん」

正門前で後ろから声をかけられる。振り向くと同じクラスの沖凱斗が手を振りながら歩いてきた。

「おはよー、凱斗。なんだい、今日は学校に来るのが早いじゃん横に並んだ凱斗に軽い調子であいさつを返す。

「おー、今日さ、朝礼当番なんだよ。めんどくさくね？」

「そりゃ、めんどいな」

それでも律義に朝早く登校してきている友人に対して、心の中で苦笑する。おちゃらけようと必死に振る舞っているが、根っこにあ

る責任感の塊はどうしようもないらしい。それがまた凱斗に絶妙の愛嬌をもたらしているのだ。それは少し滑稽で、少し悲しく感じってしまうけれども。

凱斗とは、高校一年の時に同じクラスになってからの知り合いだ。最も、頻繁に話すようになったのは二年に進学してからだ。それまではお互い相手のことを風景と思っているかのようにふるまっていた。それは相手が嫌いだからとかの話ではなく、自分と相手との間にある、見えない境界線を強く意識していたからだ。ステージが違う。二人とも同じ教室で過ごしてきたが、きつと別々の方向を向いていたのだ。それは決して悪いことではないと思うが、必然、二人の視線は交わることはなかった。

視線を変えたのはどちらだったのかは、今となってはわからない。僕かもしれないし、凱斗かもしれない。もしかしたら、二人とも視線を変えた先に相手があったのかもしれない。

だが、視線を変えたきっかけは覚えている。ちょうど半年前、二年生に進学してから一か月たった、ゴールデン・ウィーク前に起こったあの事件だ。

最も、あの事件の話を、当事者だった凱斗の前では絶対に話せない。それは、彼を貶めることになるからではなく、憐れむことになっってしまうからだ。

凱斗と一緒に教室に入ると、暖房が効きすぎているらしく、温かいというよりは暑いくらいだった。

「ちょ、暑すぎね？ まーた、誰かが設定温度をいじったのだろ」  
凱斗は悪態をつきつつ、エアコンの設定温度を下げている。確かに、コートを着たままだと汗ばむくらいだ。僕は窓側の自分の席に向かいながら、手早くダツフルコートを脱ぎ始めた。

コートを脱ぐと体感温度的にはちょうどいい。秋の湿気を含んだ温かい空気が、体を包み込むようだ。まとわりつくように眠気を誘うこの感覚は、朝、自分の体温で温められた布団にくるまっているのと同じだ。

よし、朝のホームルームまであと十五分。自分席で気持ち良くまどろんでいよう。

そんな怠惰な決意は、自分の席の隣にいるクラスメートを目視した瞬間に急速にしぼんでいった。

「おはよう。光野さん」

一応、クラスメートとしての礼儀で朝の挨拶をする。機械的に、最低限の単語しか使っていないけど、まあ、それはしょうがないと思う。だって。

「……………おはよう」

あちらは明らかに嫌々に、嫌悪感たつぷりなんですもの。前を向いたまま、目も合わせようとしめない。全身からは、『アンタキライ』オーラがバシバシ出ていらっしやる。こんな態度を取られたら僕としてもどうしていいかわからない。無視されるのは別に平気だが、嫌われるのは実はあまりなれていなかったりするのだ。

隣の席の光野 聖歌さんとは、凱斗と同じで、高校一年生のころから同じクラスだ。ただ、凱斗と違うところは、一年のころからこ

の関係が続いていることである。

「どうやら、彼女は僕のパーソナリティが相当お気に召さないようだ。僕としては、無味無臭の人畜無害な生き方を心がけているつもりなので、そう、易々と他人に嫌われることはないと思っていたのだけれども。どうも、高校一生の時に、同じクラス内で徐々に明らかに僕のパースナリティが彼女の鼻についたらしい。

一度、面と向かって言われたことがある。

「私、燈火君のその、事なかれ主義で、日和見主義で、敗戦主義なところがすごくムカつくんだよね」

「いったい僕はいくつの主義を持っているんだよ！ と、ガラにもなく突っ込みたかったのだけれども、よくよく考えてみれば、どの主義もそれなりに僕のパーソナリティを言い当てているので、最終的には納得してしまい、あいまいに笑っていた僕を見て、ますます彼女は気分を害してしまった。

そんな訳で、先の席替えで僕と席が隣同士になってしまった光野さんは、居心地の悪い思いをしているようだ。

無論、良識のある高校二年生の光野さんは、単に気に入くわないからといって、僕に嫌がらせをするような人物ではない。そして、僕は嫌われていようと、実害がないのなら気にしないように努めてしまう。要は現状維持。決して自分からは現状の改善などは行わないめんどくさがり屋なのである。

そんな訳で、僕と光野さんの間には、一定温度の冷たい空気が常に流れている。

いくら彼女の敵愾心を無視することもできて、この場で机に突っ伏して微睡むことができるほど、僕の神経は太くない。

だけどおかしいな。光野さんがこの時間に教室にいることは珍しい。彼女は、確か早朝から練習があるという、女子剣道部所属しているはずだ。いつもは、彼女は朝のホームルームぎりぎりに教室に飛び込んでくる印象なのだけれども。

何かあったのだろうか？ もしかしたら怪我とかしたのかな？

少し気になって、隣に座っている彼女に視線を移すと、思いつきり目が合ってしまった。訝しそうに僕のことを見つめていたらしい彼女は、一瞬びっくりしたような表情を見せた後に、再度、きつく僕を睨んできた。なんで僕のことを見ていたのか気になったものの、とりあえず敵意がないと示すために、あいまいに笑ってみたら、なぜか彼女は気分を害したのか、顔を背けるように反対方向へ顔を向けてしまった。わざわざ頼杖をついている彼女の左手が、僕のほうへ顔を向けないという、強い意思表示のように見える。

あいも変わらずな彼女の態度に、少し白けた気分になりながらも、僕は、この時間に彼女が教室にいる理由に気づいていた。

黒板に書いてある今日の日付から始まるカウントダウン。ちょうど一週間後に始まる中間テストに向けて勉強に励むよう、本日からあらゆる部活動は禁止なのだ。

「なあ、なあ、燈火。今日の英語の課題やってきた？」

いつの間にか、僕の後ろの席に座っていた凱斗が、シャーペンで僕の肩を突っつきながら聞いてきた。振り向くと、彼の机には白紙のノートが開いている。いつものように、僕のノートを写す気満々らしい。

「なんだ、またかよ。やってきたけどあっているかどうかなんて自信ないぞ」

そう文句を垂れながら凱斗に課題をやってきたノートを渡す。無論、本心から彼を非難しているわけではない。あくまでポーズだ。僕は気遣いながら、言葉に気安さをこめている。

「へへ、いつも悪いですなあ。旦那」

凱斗は、悪びれながら、僕のノートを写し始める。彼のこの態度もきつとポーズなのかもしれないと、僕は勝手に想像してしまう。そんな自分が少し嫌になり、僕は彼から目をそらすように、目的もなく自分の携帯いじり始めた。

「ねえねえ、せいちゃん。あの噂聞いた？」

携帯電話でニュース欄をチェックしていると、光野さんの周りに数人の女子が集まってきていた。僕以外には、明るく社交的な光野さんの周りにはこんな風に人が集まってくる人が多い。

「えー、何、噂って？ どんなの？」

「なんか、見た人がいるみたいだよー？」

「うんうん、私も聞いたー？」

彼女たちの明るい声が教室に響く。いつもなら、積極的に女の子達の会話に加わっていく凱斗は、課題を写すのに忙しいらしい。急かすように、シャーペンを走らす音が背後から聞こえてくる。

「え、誰が何を見たのよー。気になるから教えてよー」

光野さんも、彼女たちに合わせてなのか、なんとというか可愛らし



い声で相槌を打っている。その変わり身の早さに心から感嘆する。女って怖え。

「なんかね、出るらしいよ？」

内緒話をするように、女の子の一人が声を潜めた。何となくだけでも。僕は耳をそばだててしまった。あと数秒後に後悔するとも知らずに。

「えー、だから何なのよー」

無邪気な光野さんの声。

「  
九条君の幽霊」

光野さんが息を飲んだのが気配でわかる。いつの間にか後ろから聞こえていたシャーペンを走らす音が聞こえない。……僕は反射的に左目をきつく閉じていた。

「おっはよ。紫月たん。一緒に学校いこーぜー」

朝、玄関を開けると、自宅の門扉の前に立っていた周が能天気  
に挨拶をしてくる。

「なんで……？」

あんた、この時間はいつも寝ているじゃない。

「なんでって、仲良しの幼馴染と一緒に手をつないで登校するの  
がルールってもんだろ」

「そんなルールは存在しない」

「ん？ 予定調和か？ いや、それとも形式美かな？」

「どれも違う！」

いや、だからそうじゃなくて。

「……え？ なに？ あんた、この時間から登校するの？ 本気？  
私はあまりの驚きに、言葉がうまく出てこない。そんな私を見て  
周は不満げだ。心なしか拗ねた様な声を出す。

「なんだよー。俺が普通に登校したらいけないってのかよー。……  
もしかして俺ってクラスからハブられている？ 俺っていら  
ない子？ ちよつと生徒会長！ あんたのクラスはいじめが起  
きている疑いが」

「いじめはありません」

「なんてこつた！ 生徒会長が黒幕だー！」

……しまった、話が脱線しすぎた。話を元に戻さないと。この違  
和感、無視をするには気持ちが悪すぎる。

「周、アンタがこの時間に登校するなんて久しぶりじゃない？ そ  
れに登校するにしても大体昼過ぎくらいからじゃない」

むしろ、学校に来ない日のほうが多かったはずだ。

「んー、俺の記憶が確かなら、この時間に登校するのは入学式以来  
だな」

「入学式つていうと……、約一年半か」

「んー、いや、中学の時の入学式以来だな」

「四年半かよ！ あんた、よく学生生活を続けてこられたわね」

「本当だな。俺もなんでかわかんねーよ」

何かが変わだ。捨て鉢な周の態度に更に違和感が募る。いつもの周なら飄々としたセリフが返って来るはずだ。

眩しい朝の光に目を細める。冬の到来を感じさせる乾いた空気の中に立つ周は、どこかおぼろげに見えた。

「……何言つての？ あんた、いつも言っていたじゃない。『いつ学校やめてもいいって』」

そう、周は自分の行動はすべて納得して生活をしていたはずだ。それは私を含め、彼に関わったすべての人にとっての共通の認識事項のはず。

「本当に何でそんな風に言ったのかわんねーよ。やれやれいったい何を勘違いしていたのやら」

「……他人事みたいに言わないでよ。自分のことですよ」

少しお説教じみた台詞を言う私に対して、周は目線を合わさず薄く冷たく微笑むだけだ。

「……まあいいわ。早くいきましょ」

「うん。夫婦同伴登校だね。紫月たん」

「意味が分からない。あんた一生学校に来なくていいよ」

「なんてこった！ いきなり倦怠期に突入しちまった」

やはりおかしい。理由がわからないが周のテンションが異常だ。はしゃぐほど楽しいことがあったのか、泣きたいほど悲しいことがあったのかわからないが、彼の高揚感を私は確かに感じ取っていた。

坂の上を仰ぎ見ると、雲一つない、青く澄んだ冬の空に、ぼつんと標識のようにバス停が現れる。

まるで空と大地をつなげている楔のようだ。

もしくは世界の境界。

一瞬、ありもしないイメージが私の頭の中から染み出してくる。

あのバス停の向こうには台地が続いておらず、上も下もただ青い空が広がっている。もしも、世界の終わりに気づかずにあの標識を超えてしまったら、真つ逆さまに底のない空へ落ちていくのだ。

永遠に空へと落ちていく自分を想像する。それはきつと悲しいことに違いない。だけど、なぜか落ちていく私は笑っていた。

「で、……あなたは何かやっているわけ？」

益体のない空想を振り切るように歩き出そうとしても、隣に立っている周がついてくる気配がない。何故か、彼は進行方向とは逆の坂の下を見下ろしている。しかも笑顔で、オーバーアクション気味に手を振りながら。

「朝のご挨拶」

言っている意味が分からん。とりあえず、周の目線の先をたどってみる。坂の下、朝の光に照らされた交差点に小さな人影がポツンと一つ、黒い染みを作り出していた。こいつはあの人影に向けて手を振っているように見える。でも。

「交差点にいる子に手を振っているの？」

小さな子供

に見えるのだけど」

そう、交差点に立っているのはおそらく子供だ。横にある郵便ポストより背が低い。周が手を振っているのに気付いているのかどうかはわからないが、こちらに顔を向けている。

目を細める。距離が遠いのか、朝の光が眩しいのか、子供の顔が判然としない。辛うじてわかるのは、おそらく左目に眼帯をしてい

るということだけ。どうやら少し視力が落ちたのかも。視力には自信があっただけに、少しシヨックだ。

「子供だからどうしたのさ。あいつが俺の親友であることには変わりはないぜ」

「親友って……、あの小さい子供とあんたが？」

「もちろん。そういう紫月さんは、あいつのことを知らないのか？」

まるで、私があの子供のことを知っているかのような口ぶりだ。

もしかしたら、私が忘れていただけで会ったことがあるのかもしれない。どこか釈然としなかったが、ここ最近の記憶を探る。が、やはり記憶にない。そもそも、遠目からではあの子供がどんな顔なのかわからないのだ

「うーん。やっぱり、記憶にないわねー」

「そっか、報われないな、あいつも」

「は？ いったいどうゆう意味よ？」

周は私の疑問をあっさり無視し、大振りしていた右手をゆっくりとおろしていく。先端を銃に模した周の右手は、ピッタリと件の子供に照準を合わせて止まる。そして。

「……バーン」

周は躊躇なく引き金を引いた。閑静な住宅街に乾いた彼の銃声が空々しく響く。表情の見えない坂下の子供は微動だにしない。

「あんた何やってんの？ 小さい子供に向けて」

「何って、親愛の証し」

まじめくさった顔でくさい台詞を吐く周に、半ば本気で呆れそうになる。何か文句を言ってやるうかと思う前に、周はさらにわけのわからないことを呟いた。

「それと、宣戦布告かな」

周がホームルーム前に登校してきたことで、教室は一時騒然となった。それは仕方がない。周が学校に現れるのは大体お昼ぐらいが多く、さらに、学生食堂で食事だけして帰ってしまうことも多かったのだ。そんな彼が朝の早い時間から教室にいる。それは、珍しいを通り越して、なぜかみんなの気分を不安にさせてしまう状況だった。

当の周本人はそんなクラスメートの反応が甚だ不満らしく、「そんなに珍しがらなくてもよくね？」と若干拗ね気味である。残念ながら周の自業自得なので慰める言葉はない。私はさっさと自分の席について授業の準備を始めていると、なぜか隣の席に周が座ろうとしている。ちよつとまで、そこはあなたの席じゃないでしょ。

「何やっての？ あんたの席は向こうじゃない」

「大丈夫、変わってもらったから」

「……何で？」

びつくりして、急いで教室の中を見回す。昨日まで私の隣の席に座っていた阿部君は、本来周が座るはずの廊下側の席にいた。私と目が合うと苦笑しながら手を振ってくる。その表情を見て、周がだいぶ無理を押し通したことを私は確信した。

「明らかに阿部君が困っているように見えるのだけど？」

「えー、そんなことないよう。ちゃんとあとでジューズを奢ることで納得してもらったし」

いや、絶対納得しないでしょ、あの阿部君の表情を見る限りは。主観的にも、たかがジューズ一本で成立する取引とは思えない。脅したのか、宥めたのか判然としないが、おそらく前者だろう。不良然とした周の格好は、周囲に圧迫感を与えるのだ。基本、優等生が集まったわがクラスメートに対しては、効きすぎるぐらいだろう。

「ただど少しおかしい。周は恰好こそは不良だが、今まで誰に対しても威圧的に接したことがなかったはずだ。誰に対してもオープンで自然体、決して揺るがない自由な精神で飄々としたキャラクター。それが、周に対する周りの認識だ。」

「何が周のバランスを崩したのだろうか。残念ながら思い当たる節がない。今度それとなく聞いてみよう。それは、ともかくとして。」

「それで？　なんでわざわざ私の隣の席にきたのよ」

「教科書全部忘れちった。机くっつけて一緒に見せて、紫月たん」

「あんた…… たったそれだけのために席を変えたの？」

「あきれた目線を投げかけても、周はどこ吹く風で机をくっつけてきている。下手くそに吹いている口笛がわざとらしい。」

「あー、授業が待ち遠しいぜ。早く先生来ないかなー。ね、紫月たん」

「そんなに授業を受けたかったのなら、教科書忘れてくんな」

「子犬のようにまとわりついてくる周に調子が狂う。あと、いつの間にかクラス全体から発せられる生暖かい視線が癩に障ったので、とりあえず周を一発叩いておいた。」

教室に入ってきたクラスの担任である池上先生は、私の隣にいる周を見て一瞬目を丸くはしたが、すぐに表情をひっこめ、淡々と朝のホームルームをこなすだけだった。確かに、周がこの時間から学校にすることは珍しいことだが、悪いことではない。むしろ学生だったら当たり前のことだ。だけど、勝手に席を変えたのを注意しないのはどうかと思う。遅刻しなかったご褒美に、黙認したのならそれは大いなる間違いだ。

結局、周と私は机をくつつけたまま授業を受ける羽目になった。そんな私たちを、なぜか先生方は好意的に受け止めている節がある。化学の阿島先生（未婚の26歳）などは明らかにわざとらしい声を出して「あらー、二人とも仲好いわねー。先生妬げちゃうなー」なんて言って茶化してきた。妬げるぐらいなら、のしを付けて差し上げますよ。この男。もちろん返品不可ですが。

周と教材を共有しながら授業を受けながら、私はある不可解な事実に気づく。それは、授業を受けることに、確信に変わっていき、私を大いに混乱させた。

「なあ、この単語の意味なんだっけ？」

中学レベルの英単語の意味を聞いてきたり。

「えーと、電・動・力……。確か手の形で……」

おしい、この場合のフレミングの法則は、右手じゃなくて左手が正解。

「あー、これは楽勝。『教育を受ける義務』だろ」

はずれ。正解は『教育を受けさせる義務』でした。

「……周、さつきから何ふざけてんのよ」

授業中におしゃべりをするわけにはいかない。一般的な社会のルールと生徒会長の肩書が、私のポリウムを下げる。

「失敬だな、紫月たん。こちらら真面目に授業を受けてるっての」



意地を張るように、周は言葉を返してきた。その表情は少し硬い。うつすらと眉間によった皺が、彼が意固地になっていることを告げている。

「真面目について……。あんたがこんな簡単な問題で躓く訳ないじゃない」

あきれた。大方、授業があまりに暇だから、無知なふりして私にちよっかいをかけてきているのだろう。こっちは真面目に授業を受けているのだ。気まぐれで妨害されたらたまったものじゃない。

「あいにくと、これが本来の実力なの」

そう言って、周は楽しそうに笑う。卑屈に、自虐的に。

昼休み前の最後の授業である数学の時間に、私と周は引き裂かれた。理由は簡単。あと一週間もすれば中間テストがあるというのに、先生が抜き打ちでテストをやると言ったからだ。教室ではブーイングの大合唱。けれども先生は素知らぬ顔で、淡々とテストを配り始める。

そんな中で最後まで抵抗していたのは周だった。

「ちよつと先生！ 席を離せってどういうことですか！」

「カンニングできないようにするためだろう。さっさと離れるバカたれ」

「いくら先生でも愛する二人を引き裂くことはできない！ さあ、

紫月たん。君も何かいってやれ！」

「さようなら。生活費は毎月ちゃんと振り込んでね」

「えー……三行半すかー……」

周はがっくりと頭を垂れ、ブツブツ文句を言っていたが、しぶしぶ席を離れた。クラス内が笑いで満ちる中、私はテストに向けて微妙な解放感を適度な緊張感で塗りつぶす。

テストが開始されてまもなく、周は席を立った。そして、教壇で教室眺めている先生に向かって歩き始める。右手にはテストの解答用紙。もう、全部解き終えたのだろうか？ いや、いくらなんでも

早すぎる。私は反射的に教室の時計を確認した。やっぱり、まだテストが始まって五分もたっていないじゃない。それに、今見た限りでは

「先生、はい」

「なんだ、もうできたのか九条」

周から解答用紙を受け取って、その場で先生がチエツクする。私は、その先の展開を予想して身を固くする。なんで、周があんな行動に出たのかわからない。

チエツクが終わったのだらう。先生はペンを置き、周を見据える。そして長い溜息を吐いた。

「満点だ。席に戻っていいぞ。ただし次からはちゃんと授業も受けるように」

教室内にどよめきが起こる。「さすが九条」「周くんカッコイイ」など、周への賞賛の嵐だ。

そんな中、私は目の前の解答用紙から目が離せない。正確に言えば、隣の席に戻ってきた周を見ることができなかった。混乱している頭の中には喉まで出かかっている台詞が、ガンガンと反響している。

周、あんたの解答用紙、何も書いていなかったよね？

退屈な授業が終わり、昼休みになると途端に教室の中が活気づく。学食の人気メニューや、購買の売れ筋商品を狙っている生徒たちが我先にと教室を駆け出していく中、沖は机に突っ伏して微睡みの中にいた。

昨日は夜遅くまでバイトをしていたせいかわれが残っているようだ。体は鉛のように重く、重力に逆らうことさえ煩わしい。まるで水の中にいるようで。

数か月前の自分が毎日のように味わった感覚を思い出す。あの時の自分は、ただひたすら“速さ”を求めただけでよかった。周りもそれを許していたし、自分もそれに満足していた。先輩達から課せられた練習は厳しかったが、終わった後に同級の部活仲間たちと興じるバカ話は楽しかったし。たまの休みを最大限に楽しみつくすことを考えるのも好きだった。家に帰れば温かい食事ができていたし、何より、両親が幸せそうに笑っていた。

不意に生じたフラッシュバックのような過去の憧憬に、沖は歯噛みしそうになる自分を強く律する。良かった、まだ俺には少なからずプライドというものがあるらしい。強がりと分かっていたいながらも、彼は自分を奮い立たせる。大丈夫、ちょっと休めばいつも通りに頑張れる。だから少しの間、何も考えずに休みたいんだ。眩しすぎる過去も、色あせた現実も、社会に壊された家族も、肩より上にあがらない左手も

ナニモカンガエタクナイ。

思考が急速に拡散していく。半目の視界がぼやけて滲む。教室の喧騒が遠くから聞こえてくるようになって、心の中が安堵感で満たされ始めたとき、

「……凱斗、寝ているのか？」

自分を呼ぶ友人の遠慮がちな声に、沖は現実に引き戻された。

## 伍

購買から教室へ帰ってくると、凱斗が自分の机に突っ伏していた。彼の生活サイクルを考えると、わずかな時間でも睡眠時間が必要なのかもしれないと考え、遠慮がちに声をかける。

「おう、燈火。昼食はゲットできたか」

顔を上げすぐ返事を返してきたので、凱斗はどうやら寝ていなかったようだ。ただ、うつすら赤い彼の両目は見なかったことにした。

「おー、ほら、この通り」

自分椅子に後ろ向きに座り、凱斗の机に購買に買ったものを広げる。

「……アンパンとコーヒー牛乳って……。どっかで張り込みでもするの？」

「そんな訳ないだろう。別に嫌いじゃないから買ったんだよ」

「……この前は、ジャムパンと烏龍茶だったよな？ あれはあれで組み合わせが変だと思っていたが」

「それも、別に嫌いじゃないからなあ」

ちなみに、アンパンもジャムパンも購買では人気がある商品とは言い難い。昼休みが終わっても、必ずと言っていいほど売れ残っている。だから、急いで購買に駆け込まなくても買えるという点で、僕の中での評価は高い。

「でも、好きなわけじゃないんだろ？」

「まーね。あんまこだわりとかないし」

「ま、お前らしいっちゃ、らしいか」

諦めたように笑いながら、凱斗は自分の鞆からビニール袋を取り出した。

「今日は弁当じゃないんだな」

「ああ、今日は朝は起きるのがしんどくてな。だから、家に箱買いしてあるこいつの出番だ」

そう言いながら、凱斗がビニール袋の中身を机の上にさらして置く。小さな箱と、小さな魔法瓶。魔法瓶は、いつもの家で作っているスポーツドリンクだろう。そして箱のほうは

「好きなんだな。チーズ味」

凱斗が弁当を作れなかった日の昼食は、たいていカロリーメイトのチーズ味と決まっていたので、半ば予想通りだ。カロリーも栄養もそれなりに摂取できることは知っているが、育ち盛りの男子高生生の昼食に、それ単品というのはあまりに酷だ。ただ、それを口に出したところで何も解決できないことを僕も凱斗も知っている。

「まあなー。チョコ味とかフルーツ味も試したんだが、やっぱりこれが一番モノを食っている気分になるからな」

「あー、言われてみればわからないわけでもないけど……ただなあ

……」

「？ なんだよ。いやに含みのある言い方をするじゃないか」

「いや、別に、誰が何を食べようが基本的に他人がとやかく言うことじゃないし……」

「まどろっこしいなあ。はっきり言えよ。逆に気になるだろ」

「……じゃあ、はっきり言うけど。それって結構匂いきついと思うぞ」

チーズ味のカロリーメイトを加えたまま凱斗が固まる。

「……………マジ？」

「いや、気になる人にはそうじゃないかーっていう程度だ。実際に僕は全然気にならないし……」

「でも、気になる人にはそうじゃないんだろう？ してお前は心当たりがある。そうじゃなきゃ、お前がそんなことを言うはずがないからな」

おお、なんとという洞察力。

「いや、本当に大したことないんだよ。凱斗がそれを食べた日は、決まって光野さんは少し強めに香水をつけ直しているみたいだから匂いが気になるんだろーなーって」

ちなみに、別の女子は凱斗がいない間に、あたり一面に消臭剤を吹き付けていた。さすがにこれを知ったら凱斗は気に病むだろから言及しない。

「むー、聖歌ちゃんは気になるのか。悪いことしたなー」

眉間にしわを寄せ凱斗が呟く。ここ数か月の付き合いでわかってきたことだが、凱斗は他人を嫌な気分にするのを極端に嫌う男だ。軽い雰囲気、おちゃらけているように見えるが、常に人一倍周りに気を使っているのがわかる。

「いや、別に光野さんはそこまで気にしていないと思うけど。それに、嫌だったら言うてくるでしょ、彼女の場合」

例え凱斗の事情を知っていても、光野さんは言うべきことは言う人だ。それは、決して凱斗を見下しているからではなく、あくまで同じ立場で話しかけようとしているからにすぎないのだが。

「それはそうだな。聖歌ちゃんはそこらへんを公平に扱ってくるし。まあ、でも、今あるストックが切れたら次はフルーツ味を買うことにする」

そう言って、凱斗は残りのカロリーメイトを口に放り込み、スポーツドリンクで一気に流し込んだ。

## 陸

「うーっす。おはよーさん」

まったりとした時間が流れるお昼時に、時間感覚のおかしい挨拶をされた。声の聞こえた方に顔を向けると、派手目な雰囲気の子が、ゆっこがクラスメイトに挨拶をしながらこっちに向かってくる。

どうでもいいが、盛大な遅刻だ。本人は全く気にしていないようだが。

「おー、おはよー」

「おはよーさん。つーか、なに？　今登校してきたの？　まーた、夜遊びしてたのかよ」

凱斗が呆れたように声をかけても、ゆっこは特に気分を害した様子はなく、カラカラ笑っている。

「おうよ！　昨日はかなり盛り上がってさー。なんてったって、地元球団の若手選手だったからね。例え二軍でも貴重でしょ。金払いてもよかったし。オールに突入は超余裕」

そう言いながら、彼女は机の上にコンビニで買ってきたであろうハムサンドを取り出していく。

「うっわー。燈火聞いたか。この女、男を肩書きと財布だけで区別してるぞ。あー、やだやだ。これが、ブランド志向の女は」

「うっせー。文句があるなら、自分の価値を上げてからこいよ」

凱斗が混ぜっ返すように、因縁をつけ、それに対してゆっこがキツイ言葉を投げ返す。はたから見れば、一触即発の空気を醸し出す非常に険悪な雰囲気だ。

もっとも、二人にとってはあくまでじゃれあっているだけで、本気で相手を嫌っているわけではない。それでも、こうして顔を突き合わせるたびにいがみ合うのは、おそらくお互いが相手に対して同族嫌悪を感じているからだろう。

図らずも二人の共通の知人である燈火には、この頃になって気づ

くことができた。同時に、二人はお互いを鏡に映る自分に見立て、自己否定していることにも、だ。

さて、そろそろ二人からは聞くに堪えない悪辣な言葉が飛び出すようになってきた。そろそろ止めると致しますか。

「はいはい。そこまで、そこまで。二人とも相変わらず仲良しだなー」

「はあ？ 何言っちゃっての？ 目、大丈夫？ 私と凱斗が仲良く見えるのなら眼科行った方がいいよ」

「そうだぞ燈火。俺とこいつは敵同士だ。それを仲良しなんて言われるとさすがに心外だぞ」

二人にとつて、割って入ってきた燈火のセリフがあまりにも心外だったのだろう。言葉の矛先を燈火に向けてくる。

しかし、二人の意識をそらした事で燈火の目的は達成している。なので、あとは適当に対応するだけだ。

「うんうん、そうだねー。ところで、ゆっこのそれ昼食じゃないの？ 昼休みもうすぐ終わっちゃうけど」

そう言つて、燈火は机の上に放置されたままのハムサンドを指さした。

「え？ マジ？ うお。あと十分しかないじゃん。くっそー、凱斗が因縁つけるからよー」

「喋ってないで、いいから食べよ」

凱斗も不満げだが、ゆっこの食事時間を削つてまで言い合つつもりもないらしい。まあ、楽しいから続けていたかっただらうけど。

燈火は心の中で苦笑する。

今の凱斗にとつて、ゆっこは数少ない本音をぶつけられる相手だらうから。こんなこと言つたら、絶対に凱斗は怒り出すだらうから決して口には出さないけれども。



「それはそうと、何でこんな時間に登校してきたの？」

ゆっこが昼食をものの五分でたいらげたのを見計らって、燈火は話しかける。

「あー、今日はサボるつもりだったんだけど気になることがあってさー」

「気になること？」

「あー……、いや、昨日な。……その」

言いたいことがあった割には、ゆっこは口をモゴモゴ動かすだけで、なかなか本題を切り出しては来ない。

おかしい。今まで燈火はゆっこが発言を言いよどむ場面なんて見たことがない。

良く言えばあけっぴろげ、悪く見れば無神経なスタンスなのがゆっこだ。そんな彼女が、サボろうとしていた学校に来てまで確かめたかったことを、何故か口に出せずにいる。

そのことが、逆に燈火と凱斗の興味を引いた。

「なんだよ。気になることがあるんだろ？ 勿体つけていないでさつさと言えよ」

さつきまでの言い合いの余韻があるのか、凱斗が少し乱暴な口調で促している。

「まあまあ、凱斗もそうせつつくなよ。午後から学校に来てまで確認したいことなんだ。漏れが無いように慎重に言葉を選ぶことはいいことだと思うよ」

燈火はやんわりと凱斗をたしなめながら、そっと、ゆっこの退路を塞ぐ。あくまで自然に、しかし強制的にゆっこが喋らざるおえない空気を場に作り出した。

「……昨日の二次会はカラオケだったんだけど、そこでさ、見た気がするんだよね」

「ん？ 何をみたの？」

「いや……、その、たぶん見間違いかと思うんだけどさ」  
「だから、何をだよ」

ゆっここのあまりの歯切れの悪さに、凱斗が本格的に苛立ち始めた。その気持ちはわからないでもない。普段から物怖じをしないゆっこが言葉を選んで話をすると、何故か隠し事をされている気分になってくる。だからと言って、こちらが苛立って場の空気を悪くするべきではないだろう。ゆっこに悪気がないのは一目瞭然だ。だって、ゆっここの表情はあまりに切実なのだから。

「見間違いかもしれないけど、気になることがあるってこと？」

「うん。まあ、そんな感じ。……正直に話すから笑うなよ。笑ったらぶっ飛ばす」

「そんなことしねーよ。それで？ 結局おめーは何を見たんだよ」  
続きを急かす凱斗を軽く睨むように目をすがめ、ぶっきらぼうにゆっこは話し始める。素っ気なさを装うように。

「昨日さ、カラオケルームは電波が悪くて一回外に出たんだよ、電話するためにさ。そしたら、さっきまで自分がいた部屋の番号が分からなくなつて、一部屋ずつ覗いていったんだよ」

「電話で友達に聞けばいいんじゃない？ 部屋の番号」

「だから電波が悪いつて言っただろーが。言われんでもわかってるっつーの。話の腰を折るな。で、だ。部屋を覗くつて

言つても、要はドアのガラス越しなんだけど、パツと見でわかるでしょ？ その部屋に友達がいるかいなかった」

「まあ、そんなもんなのかもね」

カラオケなんてほとんど行ったことがないからゆっこみたく断言はできない。

「ん、まあ、じっくり足を止めて見る必要はないから、歩きながら部屋を覗いていったんだよ。……そしたらさ、照明が消してある明らかに使われていない部屋に誰かがいたんだよ」

「……そんなの、店員が片付けしてただけじゃねの？」

拍子抜けしたように、凱斗が合いの手を入れる。ゆっこの今までの話は、出来の悪い怪談のようだ。正直、会話が盛り上がらないばかりか、白けた雰囲気を助長させる稚拙なレベル。今時の学生だってもう少し怖がらせるように工夫する。

「もちろん、私だって最初はそう思ったさ。

だけど、

ちよつと気になることがあって、もう一度、覗いてみたんだ。そしてたらやっぱり誰もいなかった」

「……え？ なに？ これで話しおしまい？」

「あ……うん。まあ……」

唐突に終わったゆっこの話。あまりに要領の得ないその内容に、凱斗もどつりアクションしていいかわからないようだ。場の静寂が耳に痛い。

ゆっこが話したかったことはこれで全部じゃない。燈火の心の中にはそんな妙な確信があった。それを聞き出すために、会話のトっかかりを探し出す。さしあたっては、さっきのゆっこの会話の中で気になる表現を二つほど。

「ね、さっきのゆっこの話の中で気になることがあったんだけど、聞いていい？」

「お、いいぞ。何でも聞きたまえ」

誰もしゃべらない停滞した空気を嫌ったんだろう。ゆっこは、オーバーアクション気味に燈火の言葉に答えた。

「何が気になって、もう一度部屋の中を覗いたの？」

「え、いやそれは、さっき見たのが幽霊かもしれないと思ったから

……」

「うーん。でも、最初見たとき店員かもしれないと思ったんでしょ？ それじゃ、わざわざもう一度見直す必要ってある？」

「……いやー、ほら、なんか、急に不安になってさ」

おどけるようなゆっこの表情は、何かに怯えているようだ。

「実は、最初から幽霊だって確信していたとか？」

ゆっこの表情が固まる。

何か言葉を発しようとする喉は上下しているようだが、空気を吐き出すだけで音につながらない。

「言っていたよね？ もう一度覗いたら、やっぱり誰もいなかった。つまり、最初からその部屋にいたのは幽霊だって確信していたんじゃないの？」

言うべきことを言って、ゆつこの答えを待つ。後ろの凱斗は黙ったままだ。今のゆつこの表情を見て、茶化すような男ではない。

ゆっこは、苦しそうに眉間にしわを寄せ、虚空を睨んでいた。そして、恐る恐るといった感じに口を開く。

「見間違うはずはないと思うんだ。あいつみたいな格好している奴はそうそういないし」

一言一言がまるで苦行であるかのように、ゆっこは言葉を絞り出す「だけど、間違いない。見間違うはずがない」

それでも言わずにはいられないのだろう。話す苦しさよりも、誰にも話さないでいる苦しさゆっこは負けたのだ。

「あの時私が見たのは、死んだはずの九条周に間違いないんだ」

放課後、周は一人で美術室にたたずんでいた。秋が深まり、日が短いのだろう。窓からは刺すような西日が部屋全体を赤く染め上げている。今はテスト期間だからか、部活動にいそむ生徒達の声は聞こえてこない。赤く染まった無音の世界で、周はどうすることもできないチグハグな感覚を持って余っていた。

周はこの美術室に足を踏み入れたことがあるのは、ほんの二、三回のはずだ。それは実感を伴って確信が持てる。だが、自分の記憶ではここには毎日のように訪れたことになっている。その矛盾が気持ち悪い。まるで、自分の記憶を見も知らぬ他人の記憶で上書きされた気分だ。

自分の記憶にまるで覚えがない。記憶の中の自分がまるで他人のようだ。

記憶の中の周はここで多くの絵を描いている。それは思い出せる。描いた絵の題材も、絵の具の付いた筆先の重みも、油絵独特の匂いもすべて覚えている。

だけど、それだけだ。

この場所で絵を描いていた時の周が何を考え、何に思いをはせ、どんな気分になったのかまるで覚えがない。記憶の中の自分は、何も感じず、何も考えず、ただ楽しそうに絵を描いているように見えるだけだ。正直、自分に瓜二つの他人を第三者の目で見ているようだ。放課後の美術室で自分そっくりのマネキンを、ただ眺めているだけの自分がいる。そんな光景が頭に浮かび、背筋に怖気が走った。ドツペツルゲンガ。

不意を衝くように、そんな言葉が頭の中から浮上してきた。確か、自分に瓜二つのそれを見てしまうと近いうちに死んでしまうことになっていたはずだ。思わず苦笑が漏れる。周自身がドツペルゲンガ―を見ても、もうどうにもならないことを知っているのだから。

昨日、出しっぱなしにしたままの書きかけのキャンバスを覗きこむ。夢のようなきれいな世界がそこには描かれている。

だけど、ただ一つ、どうしても拭い取れない汚れのように、耐え難い現実がそこにはあった。

坂の下の交差点の信号機。

この絵には決して描かれないはずの異物。

だけど、この信号機が存在することを周は知っている。

そして、なぜ、信号機がこの交差点に設置されることになったのかも、周は知っている。

キャンバスの表面に、そっと指を這わす。硬く乾いた油絵の具のデコボコの感触を確かめるように。桃色の桜並木をなぞりながら、指を移動していく。指の行きつく先は坂の下の交差点。何かを知らせるように、真っ赤に光っている信号機に指の腹を押し付ける。

不意に、このまま爪で、この信号機の絵を削り取りたい衝動に襲われた。

無意識につばを飲み込む。徐々に指先に力がこもっていくのを感じ覚する。小刻みに震えながら、信号機の赤色に爪を立てたとき、今朝、坂の下にいた少年の姿を思い出した。

無表情で見上げるように周を見ていた少年。だけど、すぎるような真剣さは感じられた。おぼろげだが、周はあの少年が自分に何を求めているのか理解しつつある。

昨日、この絵に描かれていた信号機を認識したとき、周の世界が変わった。

いや、目が覚めたと言っただろう。

急激に覚醒した意識は、それまで他人事のように積み重なっていた記憶から、この世界の異常性を認識する。そして、隣にいた紫月の存在が、この世界の在り方を教えてくれた。

なんとという奇跡。目が覚めたのに未だ夢の世界に俺はいる。

水泳部を辞めなかった沖、悪い遊びを覚えなかったゆっこ。周の知らない人物が、昨日、当然のように友人として振る舞ってくる。

彼らは全てが満たされている設定なのだろう。陰りがさすことがない彼らの表情は、薄っぺらな人形を見ているようで、人間味が欠けていた。

そして、どうやら俺にも設定が存在するらしい。全ての問題を解くことができず白紙のまま提出した抜き打ちのテスト。もとより自分の学力などそんなものだ。だが、その場でチェックされたテストには、自分の筆跡で正解の解答が書かれていた。

予定調和のように現実が歪められる。この世界は役者が設定を外れることを許さない。どんなに役者がへボでも、世界は自らを書き換えて帳尻を合わせてくる。

ふざけるな。

胸に暗い炎がともったようだ。周の挙動が設定に合わないものなら、世界は即座にその事実を否定してくる。つまり、周の意志はこの世界に響かない。自分自身が世界に必要とされていない、圧倒的な疎外感。それに耐えられなくなって、俺は自ら

いつの間にか、心臓が早鐘のように脈動しており、鼓膜を揺さぶっていた。周は目をつむり深く呼吸してから、注意深く指先をキャンバスから離す。爪の先に多少は赤色が付着したが、絵の中の信号機は健在だった。

この世界は俺を必要としていない。だけど、この世界は俺に優しい。俺がどんなに無能で、失敗ばかりしても、無かったことにしてくれる。しかも、用意してくれる結果は常に最高のものだ。

世界が俺に望んでいることは単純だ。彼女の学生生活に彩りを添える、ただそれだけ。だって世界は彼女のために作られたのだから。見ることが叶わなかった幼馴染の成長した姿に胸が痛い。かつての幼馴染が少年の姿のままにいる意味を考えたくない。

絵の中の赤信号は何かを警告しているようだ。きっとこの絵に信号機が描かれていること自体、この世界にとってバグみたいなものだろう。それが致命的かそうでないかは周にはわからない。

確かなのは、この世界のためには、今ここで削り取ってしまうことが正解だろう。だけど、周はあえてそれをしない。わずかに裂けた世界の傷。これはいつかこの世界を壊すかもしれないのに。

この世界は多分間違えている。この世界を望んだ幼馴染と、この世界に望まれている幼馴染。そのどちらの在り方も、酷く歪で悲しいものだ。だけど、周はこの世界を否定することができない。

あまりにも稚拙で、子供のママゴトのような世界。誰でも一度は夢想したであろう、ご都合主義の夢の楽土。この世界には、悲しみや、苦痛、絶望を伴う悲劇なんて最初から存在しないのだ。だから周はこのぬるま湯のような世界に漬かっていたい。何も考えなくても、勝手に世界は良い方向に転がっていくのだから。

わかっている。この世界の在り方は、俺自身だけではなく、あいつもきつとダメになる。だけど、今はこの温かい世界で、少し休んでいきたいんだ。だって、この世界には俺が欲しくて堪らなかった物がたくさんある。

それに、俺には次に目が覚める世界が存在しないのだから。



厄介なことになった。

燈火はだれにも聞こえないようにため息をつく。

ゆっこが見たという週の幽霊の話を、近くにいた光野さん達のグループが聞いていたのだ。いや、実際は聞き耳を立てていたのかもしれない。ゆっこや凱斗みたいに、存在が派手なタイプは、本人がその気がなくても、勝手に周りが注目しているのが常だ。燈火にとつては、同じクラスメートとはいえ大勢で話すのは苦手なため、隅で聞き役に徹するしかない。もとより、あまり聞きたくない類の話題だ。最小限に受け答えができるよう耳に残すが、自分の感情がこの場から遠ざかろうとするのがわかる。

「嘘！ ゆっこも九条君の幽霊を見たの？」

「え？ あ、うん。見たよ！。勘違いかもしれないけど。後姿がそっくりだった」

唐突に話に割り込んできた、クラスメートに一瞬びっくりしながらも、ゆっこは瞬時に相手のテンションに合わせて会話をつなげる。一瞬で相手と接近する女子独特の間合いの取り方は、何度見ても見事だと思つ。距離感が絶妙なのだ。往年の親友のごとく会話を始めても、どちらも一線を越えてこない。薄いフィルターを介した、表面をなぞるような会話。この作法が出来るか出来ないかは、女子の間では結構重要なことらしい。ちなみに、若干口の悪い凱斗や、大抵の人間には構えて対応する僕なんかは、件の作法は苦手分野だ。なので、無理に女子たちの会話に参加することはなく聞き役に徹する。

「ね、ね。どこで見たの？ 九条君の幽霊？」

週の幽霊の話は今が旬なのだろう。鮮度のよさそうな情報をゆっこから聞き出そうと、皆必死である。……いや、前言撤回。場の空気を読まず、会話に参加しない不届きモノが約一名。一応会話を聞

いているように装っているが、白けた表情が何より彼女の本音を伝えていた。

不思議に思う。光野さんは本来、協調性に欠ける人物ではないのだが。

会話には参加せず聞き役に徹する彼女は、死んだクラスメートを話題にすることを忌避しているようだ。どうやらこの話題で盛り上がるクラスメート達も同罪のようで、彼女達に向ける目の奥では侮蔑の光がチラチラ瞬く。隠しきれない彼女の嫌悪感。話に夢中のゆっこや、他の女子達は気付かないようだが、傍観者の僕にはありありと感ずることができた。

ふと、光野さんと僕の視線が交わる。彼女は一瞬、訝しげに眼をすがめ、

あ、泣く。

何故か、唐突にそんな予感がした。

しかし、実際に光野さんがその場で涙を流すことはなかった。まるで僕なんて初めからいなかった様に目線を切り、作り物の笑顔で会話の渦へ戻っていく。

シュツと、つむじ風のような感傷が胸に去来した。予測不可能な自身の感情に面食らいながらも、人知れず息を整え、動悸を落ち着かせる。そっと、窺うように、光野さんに目を向けると、彼女はあえて僕を視界から外すようにしていた。

見たことがない彼女の泣き顔。だけど僕は遠い昔にそれを見ている。そんな確信が胸に残った。

「やだー、そのカラオケボックス怖くて行けなーい」

意識的に他人の庇護欲を刺激しようとする大げさな声が響く。見ると、クラスメートの一人が演出過剰に身をすくませながら、不安そうな目で凱斗を見つめている。

うーむ、あざとい。

凱斗は女の子が期待していることを敏感に察知するも面倒事は御免のようで、あいまいな笑顔で無難な台詞を探している。が、それより早く、何故か不満げなゆっこが台詞を引き取った。

「いや、怖いはないでしょ？ 一応クラスメイトだったんだぜ。九条は」

場に少し緊張感が生まれたのがわかる。幽霊となったクラスメートを怖がりながら、されど興味津々で話していたメンバーには、ある種の背徳的な連帯感が生まれていた。後ろめたい話題でもみんなで話せば適度なスリルが味わえて楽しい。そんな共通認識の下で催される会話には、決して言うてはならない禁句がある。それ言うてしまったら楽しい会話はおしまいだ。共犯者の裏切りは、他のメンバーを白けた雰囲気させるだけで、全く旨味がない。

だけど、あえてゆっこはその言葉を口にした。順応性の高い彼女にしてはあり得ないミス。だが、彼女の表情には自分の失敗に対する後悔はない。だとすれば、おそらくゆっこはみんなのルールよりも自分の信条を優先させたのだ。元クラスメートの幽霊に対してネガティブな発言をする。このことはゆっこの中では看過できないタブーなのだろう。団らんの空気を壊しても構わないぐらいに。

「あ……、そうだよね。さすがに怖いってのはないよね。同じクラスメイトだったんだし」

周囲の温度が低くなっていくのを嫌って、先ほどの女の子は場をとりなすように自分の発言を翻す。が、目は笑っていない。もめ事

を嫌い、一步引いた大人の対応を見せることで、被害者の位置に収まろうとする。それは、嫌な雰囲気を作ったゆっこを暗に糾弾する状況を作り出すことに他ならない。更に、他のクラスメートも目線や仕草でその子に同情の意志を示していたりする。日和見主義の同調意識。こんな小さなコミュニティでも数の暴力は存在するのだ。

隣の凱斗は敏感に空気の変化を察知しているが、女子同士の無音の圧力のせめぎあいに参加などできるはずもなく、只々閉口するしかないようだ。もちろん僕は傍観者だ。淀む空気の外側で、決して巻き込まれないように息をひそめる。

停滞する雰囲気を払拭したのは、今まで会話に参加してこなかった光野さんだった。

「どこにいけば会えるのかなあ。九条君に」

あ、上手い。

素直にそう思った。あえて幽霊という言葉を使わないことで、死んだ周に対するイメージを和らげている。それに、死んでしまった人に会えるなら会いたい。そんな思いがこもった言葉は、不思議と耳触りがよく聞こえてくる。言った本人は相変わらずの無表情だったけれども。

……声に若干の真剣味が帯びていると感じたのは僕の気のせいだろうか。

「あー、私も会ってみたいかも九条君に」

光野さんの言葉はやはり救いの糸だったらしい。暗いムードを嫌う現代っ子達が、機を逃さず言葉をかぶせてゆく。

「今のところ九条君が目撃されているのは、駅前のゲームセンターと、ファミレスの駐車場、あとカラオケボックスかな」

「もの見事に遊ぶとこばっかだねー。九条君らしいと言えばそうだけ」

「とりあえずさ、今日みんなで行って見ない？ 九条君の目撃情報があった場所に」

「え、でも今日からテスト準備期間じゃん」

突然割り込んできた僕の言葉に、虚を突かれたような表情で彼女たちが僕を注視していく。

せつかく再度温まりかけていた場の空気に水を差す一言を放った僕の真意を測りかねているのだろう。……光野さんからの刺すような視線から目を逸らす。

もちろん、場の空気を壊すことは僕の本意ではない。だけど、”死んだ周に会う”ことを具体的にイメージした瞬間に強烈な不安に襲われて、つい口を出してしまった。

何故、僕があんなにも不安を感じていたのかわからない。……周の幽霊は既にこの左目で視ているのに。

## 拾

ひっそりと行われた周のお通夜には、ほとんど弔問客がおらず、線香の匂いが充満した部屋には、耳鳴りのような静寂があるだけだ。最近の写真がなかったのだろう。遺影に使われている写真は恐らく彼が中学生の時に撮ったものだ。まだあどけなさが残る彼が薄く微笑んでいる。だけど、どこか笑い方がどこかきこえない。笑い方がわからないのに、無理して笑顔を作っている、そんな印象を受けた。

布団に寝かされている周は、一見眠っているようにしか見えない。だけど、彼の鼻の孔に詰められている綿の白さが、彼が二度と起き上がらない現実を有無も言わず突きつけてくる。

久しぶりに間近で見る周の顔には、つい最近まで彼がまもっていた、周囲を威嚇するような険が感じられない。穏やかな彼の表情は、何もかも光に満ちていた僕らの子供時代を嫌でも思い出させた。

だからなのか、僕の中の喪失感が思ってもいないほど大きい。言語化できない感情の奔流が身体の中を駆け巡る。周と一緒に過ごした幼い頃を思いだすことは、どうしたって鈍い痛みが伴うのに止めることができない。

暗く、甘い懐古の念を振り払うように顔を上げる。そして、目に飛び込んできたモノに思わず息を止めた。

飾られている遺影の中で、幼いカノジヨが笑っていた。

唐突に、甲高い子供の泣き声が部屋の静寂を切り裂く。部屋の奥を見ると、幼稚園児の周が大声で泣いている。それを、目を真っ赤にした天美さんがなんとか宥めようとしている。

僕の横には、若かりし両親が悄然とした面持ちで座っている。二人とも布団に寝かされたカノジヨを覗きこむように身を乗り出している。カノジヨの顔は立っている僕からは見る事ができない。さっきまでとは違い、部屋の中が重苦しい悲しみに満ちている。

そこかしこからすすり泣く声が聞こえ、多くの人が悲しみに顔を歪めている。

……この場面は知っている。何度も人伝で聞かされたから。

これは、僕の知らないところで、唐突に終わりを向かえた僕の幼年期だ。だから、この場所に幼い僕は登場しない。

だから、これは、お前が見せているのか、周。

左目の疼きを我慢しながら、在りし日の両親の肩越しにカノジヨの顔を覗き込もうとする。

心中に去来する後ろめたさは、目に行うことができなかつたカノジヨの死に顔を、幼馴染の妄執越しに対面をしようとしているからだろう。

緊張しているのだろうか、いつの間にか喉が干上がっていたので、罪の意識と一緒に唾を飲み込む。

思い出の中のカノジヨはいつも笑顔だ。だから、今から覗き込もうとしているカノジヨの顔がどんな表情なのわからない。

……あと少しだ。

『見てはいけない』と、警告を発する理性を抑え込んで、僕は身を乗り出したその時、

「燈火君、今日はありがとう」

僕に向けて発せられた声によって、唐突に現実に引き戻された。

## 拾巻

声のした方に振り向くと、喪主であり、周の父親の九条宗司さんが立っていた。

さっきまで耳の中で鳴り響いていた幻聴は消え失せ、部屋には静寂が戻っている。遺影も周の写真に戻っていた。

陰鬱な雰囲気の中、僕を見据える宗司さんの表情からは何の感情も読み取れない。手入れの行き届いた黒い喪服で身を包み、背筋を伸ばして僕と相対する姿は、一人息子を失った父親というよりも、教壇に立つ教師に見えてしまう。

まるで、匂いさえも感じさせまいとするような宗司さんの雰囲気は、部屋全体を覆っている陰りを助長するかのようだ。

「急だったからね、助かったよ。私一人ではどうしようもできなかった。ご両親にもお礼を伝えてもらえないかな」

発した言葉の内容とは裏腹に、宗司さんの声色からは、やはり焦りや動揺は微塵も感じられない。

「いえ、そんな、僕は言われた通りのことをやっただけですから」「それでも私が助かったのは事実なのだから謙遜することはないと思うよ。……そうだ、せつかくだから周の部屋を見てやってくださいね」

「周……君の部屋をですか……」

「そう。久しぶりだろう？ 燈火君が来てくれたら周も喜ぶと思うんだ」

「そう、ですか」

そんなことを言われたら断りづらい。それに、宗司さんは僕の答えを待たずに周の部屋に向かってしまう。僕は無言でその後を追うしかなかった。

正直な気持ちとしては周の過ごしていた部屋に行くのは気後れる。あの日を境に、今の今まで訪れることを避けていたのは、僕も



周も顔を合わせることを何となく避けてきたからだ。あのころの僕らはどうしたって子供だったから、お互いにかける言葉がわからず、後ろめたい気持ちを引きずったまま今日まで過ごしてきた。それなのに、周がこの世を去ってしまったから彼の部屋を訪れるのは、家主が不在なのをいいことに金品を物色するコソ泥になったみたいだ。「恥ずかしい話だけれども、昨日、私も久しぶりに周の部屋に入っただんだ」

周の部屋がある二階に向かう階段を上りながら、宗司さんは僕に話しかけてきた。だけど、宗司さんの顔は前を向いたままで、後ろから着いていくだけの僕には彼の表情は窺い知れない。誰もいない虚空に言葉を放つ宗司さんの姿は、まるで教会の懺悔室で己の罪を独白しているみたいに見えた。

「しかし、まいったよ。部屋があんな状態になっているなんてね。こんなことになるまで気づかないなんて父親失格だ。……やはり、あれかな。母親がいなくなったのは、周にとってはよほど辛いことだったのかな」

宗司さんは滔々と言葉を繋げている。何をいまさら、と、僕は大きくあきれながらも少し驚く。こんな弱い言葉を吐く宗司さんを、僕は今まで見た記憶がないのだ。やはり、一人息子である周が自殺したことに、何かしら感じてはいるのだろう。それでも、表面上は何事もなかったように淡々と振る舞えるのは、彼の意志の強さなのだろうか。それとも、僕が鈍感でいようとするとするせいで、他人の心情を窺い知る機微に欠けているからなのか。

「あの、天美さんには連絡されたのですか」  
『母親』というキーワードを聞いて、僕は思わず今まで聞くに聞けなかった疑問を口に出した。

「ああ、事務所と弁護士に連絡を入れたよ。今はイタリアにいるらしい。何か個展をやるそうで、その準備だそうだ。すぐに戻るよう伝えるとは言っていたがね。まだ具体的にいつこっちに来るか連絡を受けていない」

こんな時でも、直接連絡しないんですね。声に出さず、心の中でそう呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0719y/>

---

まほろばから君を呼ぶ

2012年1月4日11時51分発行